支え合いマップ
聴取項目集

〈2016 年 5 月版〉

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞

〒350-0451　埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1

電話・049-294-8284　ファックス・049-294-8283

E メール・kiharas@msh.biglobe.ne.jp

ホームページ・http://www5a.biglobe.ne.jp/^wakaru/

本冊子の活用法

①支え合いマップづくりの「必携」。

本冊子は、支え合いマップづくりの際、どのようなことを聴取したらいいのか、また聴取の重要ポイントや留意点は何かを、テーマ別にまとめたものである。

②主として研修資料用。

本冊子は、主として支え合いマップの専門研修の教材として作成したものである。マップの事例が５１あるが、個々の解説は講義の中で行うので、ここでは省いている。

③Ａ４に拡大して使用することも。

本冊子はＢ５になっているが、使用する際はＡ４に拡大してもよい。

＜目次＞

⑴一人暮らし高齢者＜４＞

⑵引きこもりの人＜15＞

⑶高齢者のみの世帯＜18＞

⑷要介護の母と息子の 2 人暮らし世帯＜21＞

⑸高齢者施設の入所者＜23＞

⑹デイサービス利用者＜28＞

⑺在宅の要介護者＜32＞

⑻認知症の人＜37＞

⑼障害児者＜38＞

⑽“迷惑な”住民＜43＞

⑾その他の「気になる人」＜45＞

⑿ふれあいのご近所づくり＜47＞

⒀住民の生活環境＜50＞

⒁ご近所福祉推進体制づくり＜58＞

⑴一人暮らし高齢者

	チェックポイント
①	**向こう三軒で日常的に見守っているか？** ■日々誰かが見守っている状態が理想。 ■見守りにはいろいろな方法があるので、見逃さないように。
②	**本人も見守られ努力をしているか？** ■本来は当事者がしっかり自分を守る努力をすべき。 ■見守られ上手さんがいるから、そのやり方を聞き出す。
③	**一人暮らし同士が見守り合っているか？** ■特に女性は、３，４軒で固まっていると必ず助け合っている。 ■近くにいる男性をどう面倒見ているかも注視する。
④	**自宅開放でサロンを開く一人暮らしの人がいるか？** ■安全を守る一環で、自宅に周りの人を招きよせている一人暮らしの人がいる。 ■そのサロンにだれとだれが来ているか、何の目的か（福祉的意義）を探る。
⑤	**困り事の解決も支援しているか？** ■ただの見守りでは仕方がない。一人暮らしならたくさんの困り事があるはず。 ■その困り事に関わっている隣人はいるか？
⑥	**男性の一人暮らしに特に注意する** ■心配なのは女性より男性。まず男性に注意する。食事はどうしているか。家事は？ ■孤立死するのは意外にも５，６０代の男性だ。元気だからといって見逃さない。 ■超高齢男性も、食事や家事、運転などに気を付ける。
⑦	**お楽しみを持つなど、高齢期を豊かに生きているか？** ■ただ見守られているだけでは、福祉が実現したとは言えない。 ■高齢なりに豊かに生きているかが大切。

⑴特に気になる人を絞り込む。

一人暮らしの人は多いので、すべての人に関心を持つのは不可能。それよりも特に注意すべき人を絞り込み、丁寧に聴取する方がいい。

①超高齢の人（９０代）。食事はきちんと作っているか。まだ運転をしているか。

②男性。５０～６０代に孤立死が多いので、この世代から注意する。

③認知症など要介護で頑張っている人（大抵は女性)。
④引きこもりの人（男性に多い)。
⑤息子に引き取られた人。本人の意思よりも息子の意向が強い。

⑵周りの人の見守り方＜事例＞

そのご近所特有の見守り方があるから、それを探し出すこと。例えば…
①隣の人が車の出入りや明りの点灯、カーテンの開け閉め等で
②本人が散歩しているのを見守る
③グランドゴルフで仲間が安否確認
④畑で隣り合った人が安否確認
⑤子供が毎日携帯電話で連絡

⑶見守られ上手さんのやり方

見守られ上手さんもいるので、探し出し、そのノウハウを引き出す。それを整理すれば、そのご近所の一人暮らし高齢者の参考になるはず。例えば…
①「夜中に電気がついていたら気を付けてね」と隣家にお願い
②出かけるとき隣家に鍵を預けて留守中のことをお願い
③今までと違った行動をとる時は隣家に知らせる
④集会などに積極的に参加して見守りをお願い
⑤周りの人を自宅に招いて普段の見守りをお願い

⑷見守り人を探し出すコツ。

「見守っている人は見当たらない」と簡単にあきらめない。見守る人を探すコツは…
①当人のごく近くに住む人に聞くこと。ちょっと離れると見えなくなる。
②見守る人はいないが、接点にいる人ならいる。まずその人を探す。その中で見守ってくれている人がいる可能性もある。（診療所、コンビニ、銭湯、スーパーなど）
③引きこもりの人も、二人ぐらいは見込んだ人がいるものだ。
④できる限りたくさんの人の情報を集める。その中に知っている人がいるかもしれない。

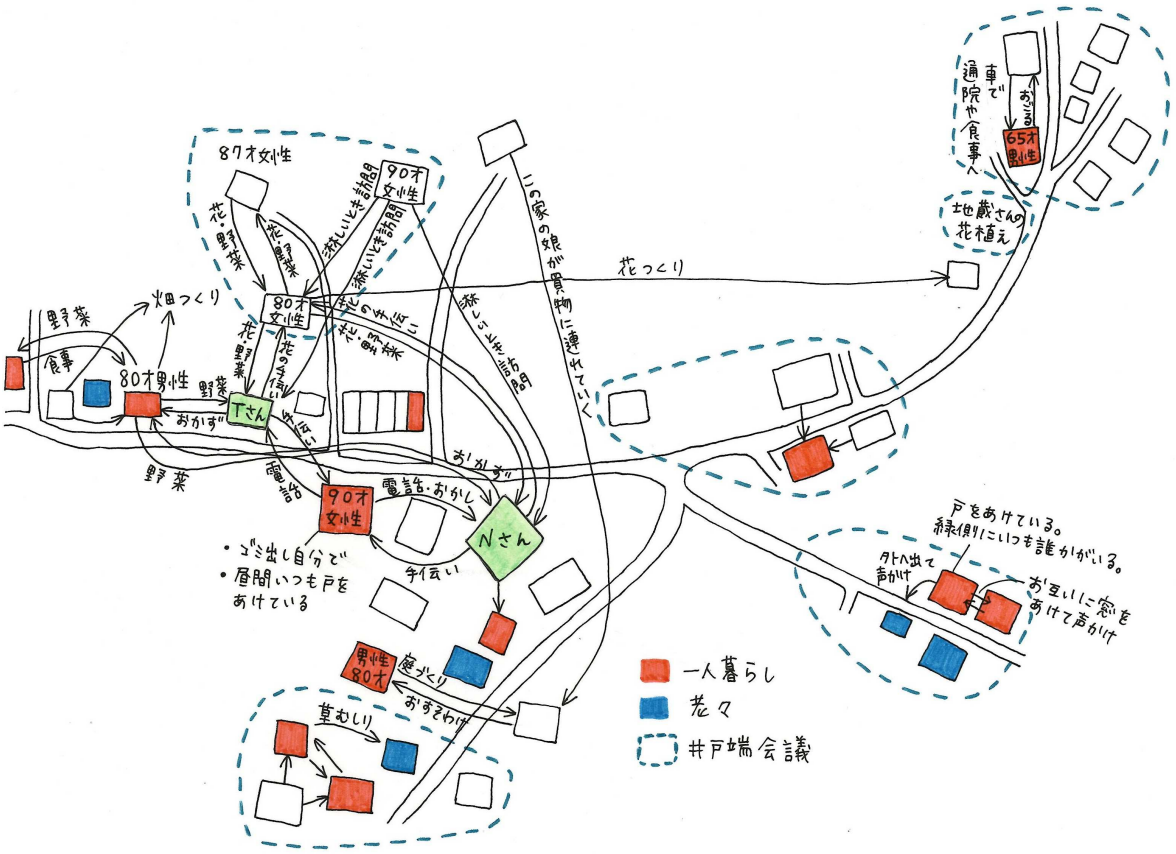
⑸一人暮らし高齢者（女性を中心に）の困り事対応＜事例＞

特に女性の場合は、男の仕事もしなければならないので大変。困り事は一見、何もないようでいて、じつはたくさんあるのだ。世話焼きさんが実際に面倒を見ているので、

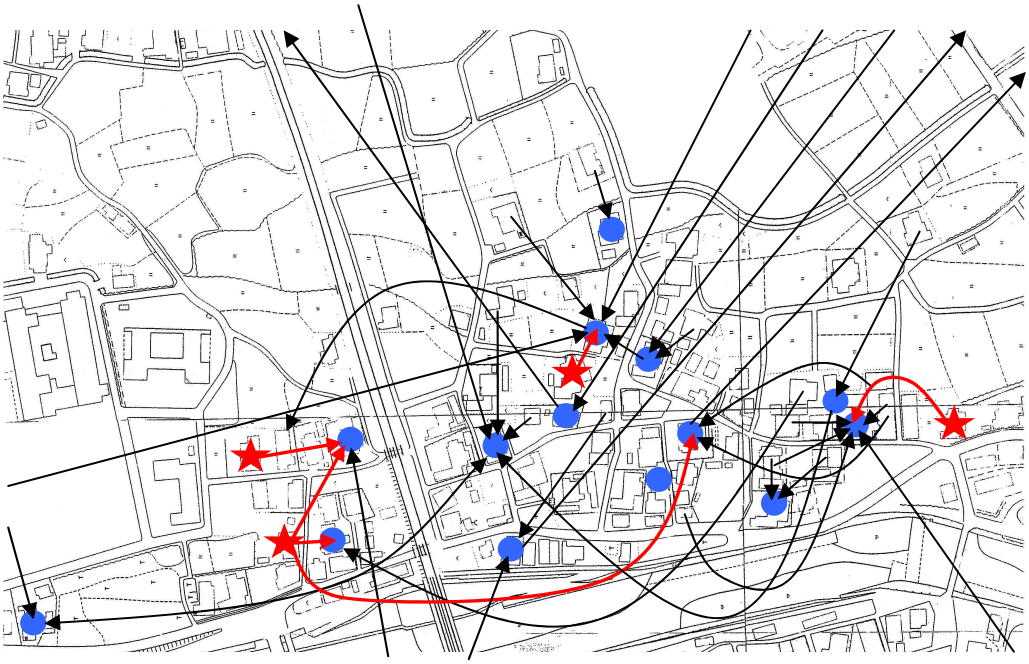
困り事を知っているはず。困り事対応と言えば…

①代わりに犬の散歩。②重い荷物を運ぶ。棚から降ろす。③電燈の球の取り換え。家屋の修理。④回覧板を代読。⑤除雪。除草。庭木の剪定。⑥買い物、通院等の移送。⑦投薬管理。⑧食事作り。⑨デイサービスへ出かける準備

＜マップ事例１＞本人も見守られ努力・見守り合い努力をしていた



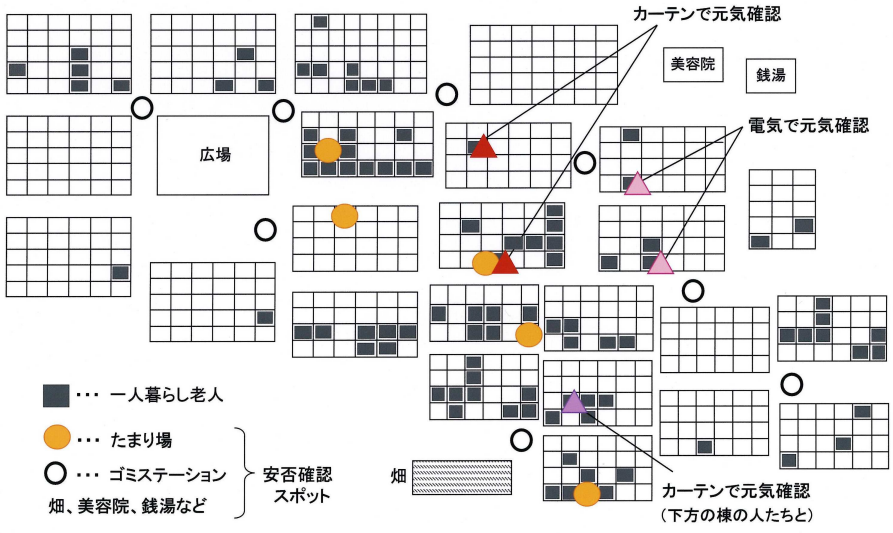
＜マップ事例２＞徹底的に調べたら、誰かが見守っていた！



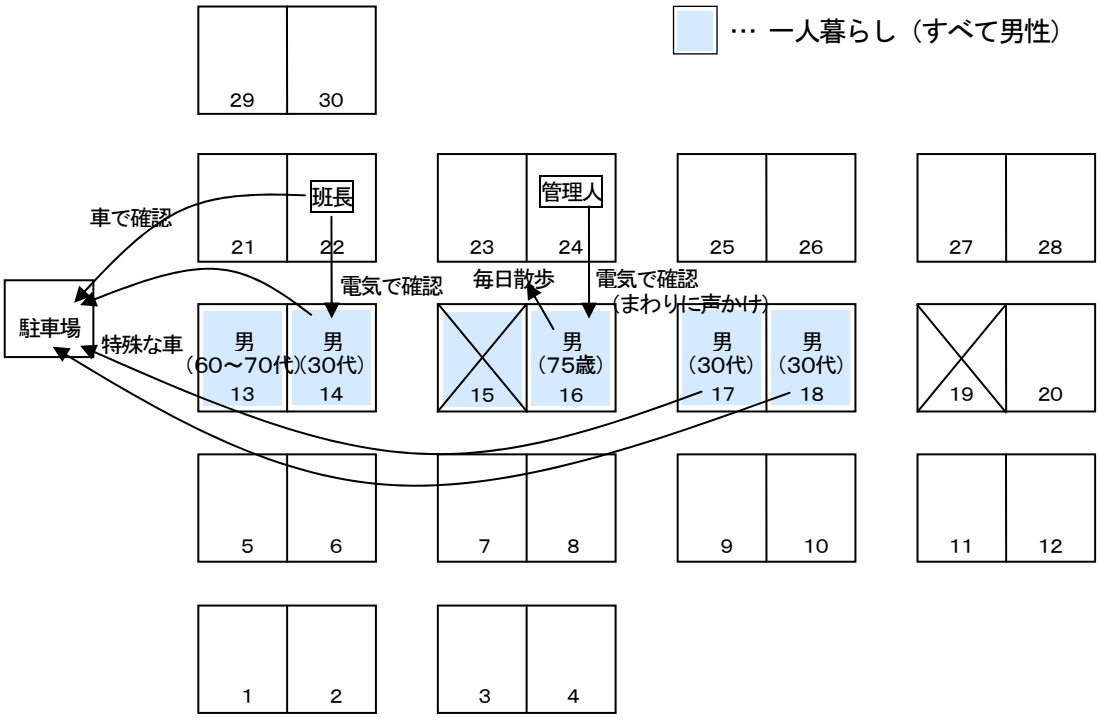
●…要援護者・気になる人
★…世話焼き

黒い線が、身内の関わり
赤い線が世話焼きの関わり

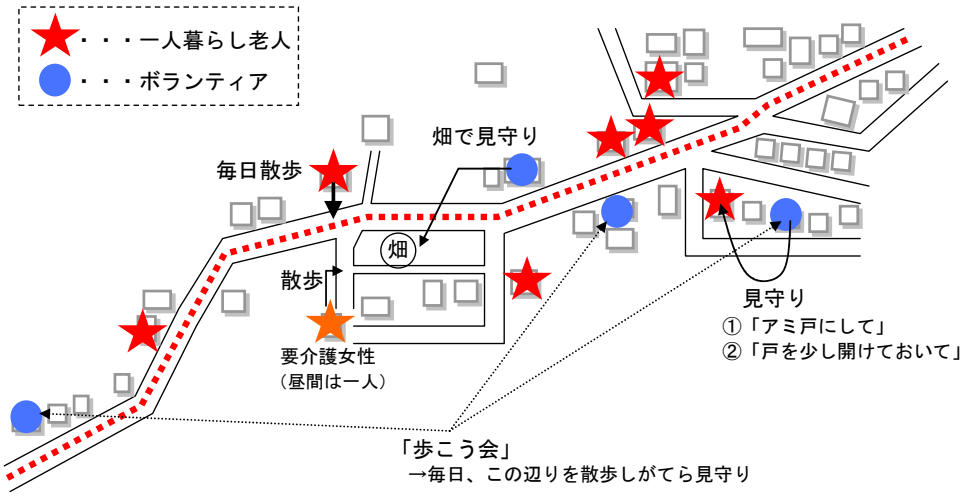
＜マップ事例３＞一人暮らし同士で見守り合っていた



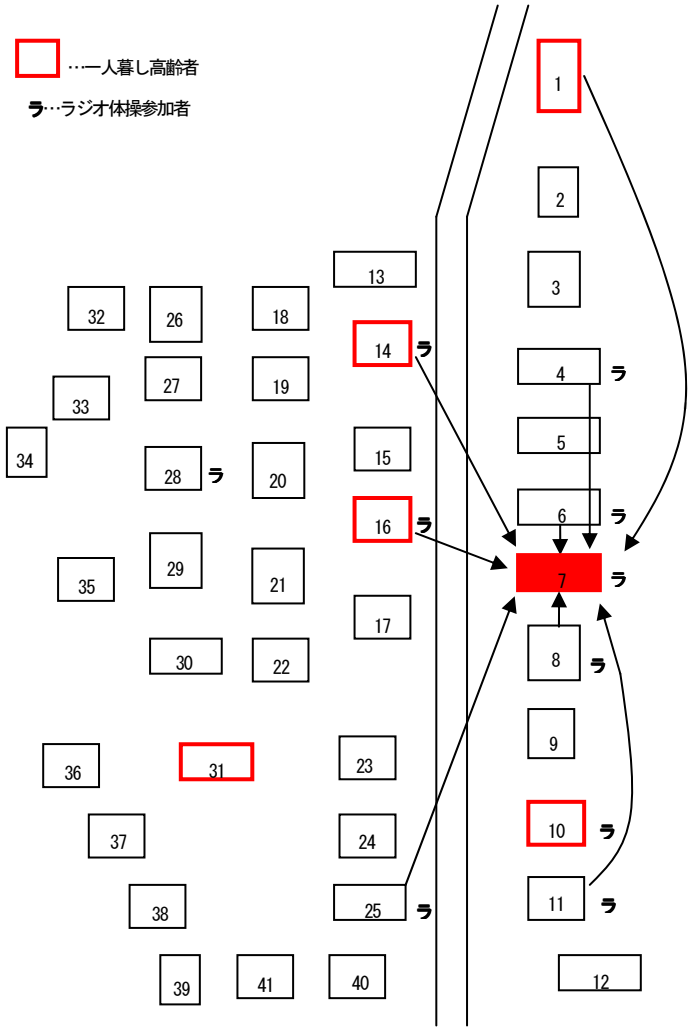
＜マップ事例４＞仮設住宅でも、気がかりは一人暮らし男性だった



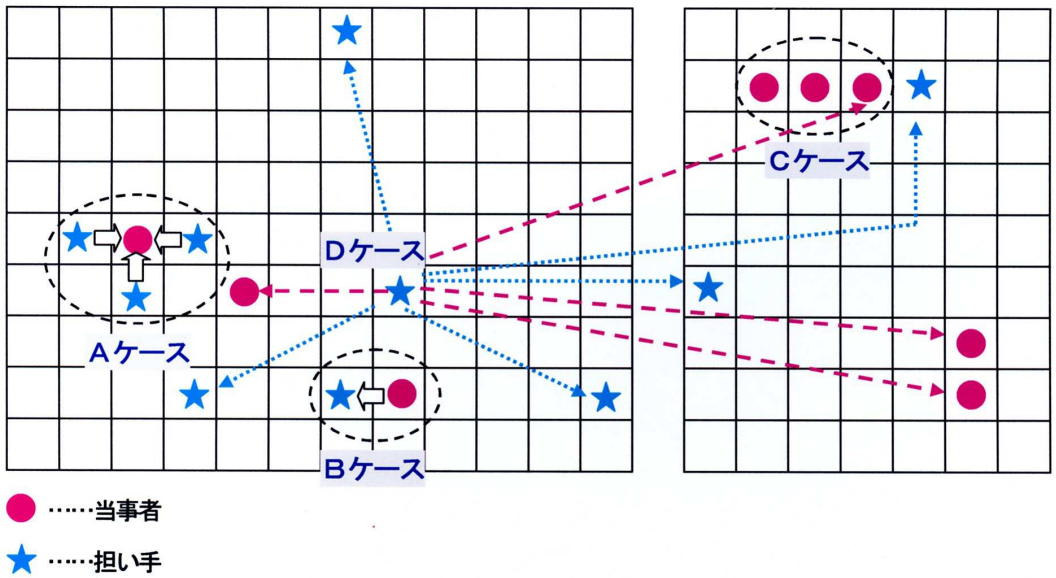
＜マップ事例５＞生活の中でついでに見守り



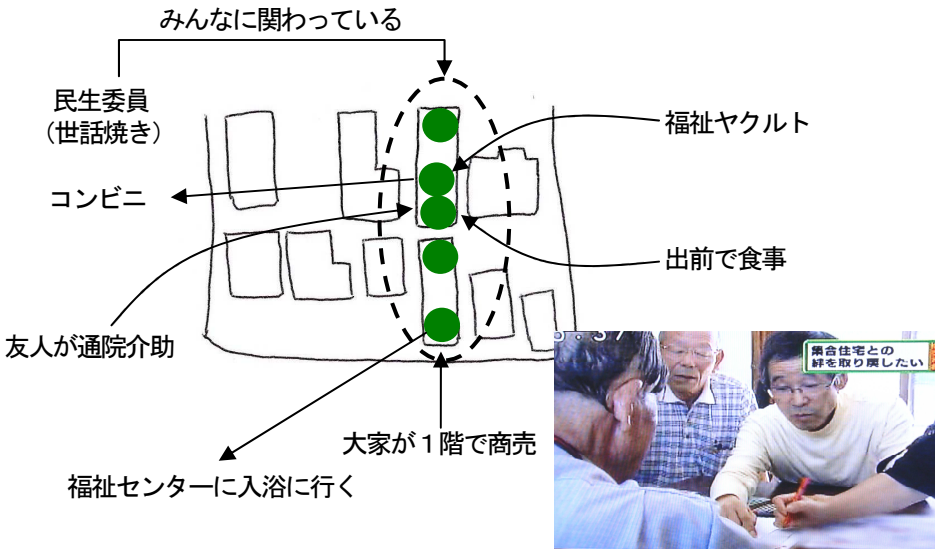
＜マップ事例６＞一人暮らしで９０歳を過ぎるとわが家に引き寄せ



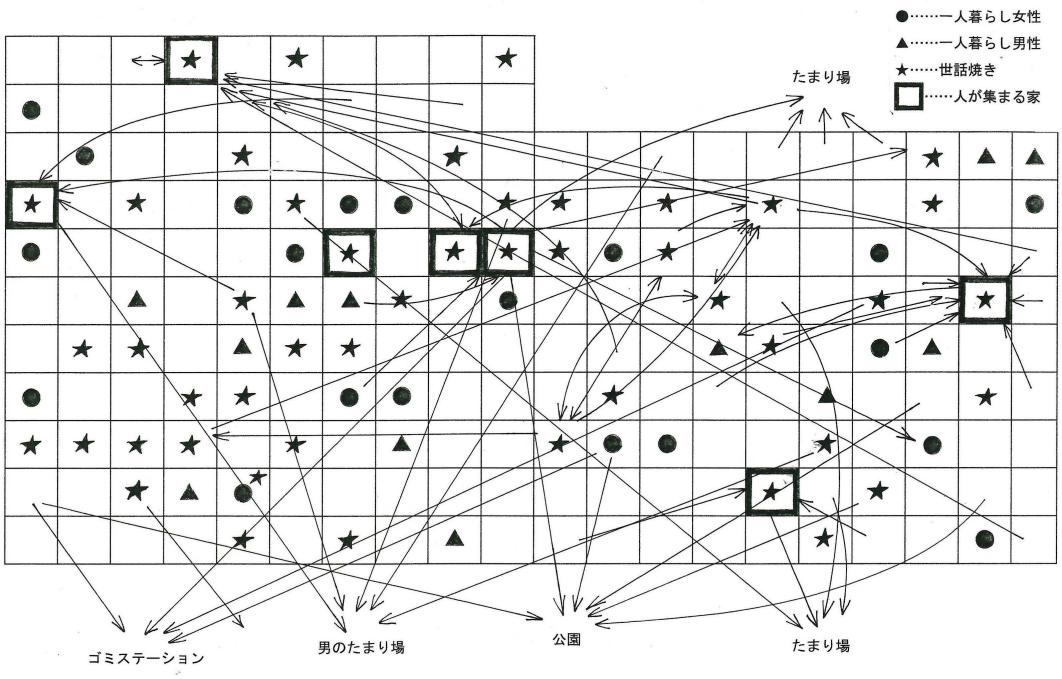
＜マップ事例７＞夫々が夫々の方法で見守り・見守られ



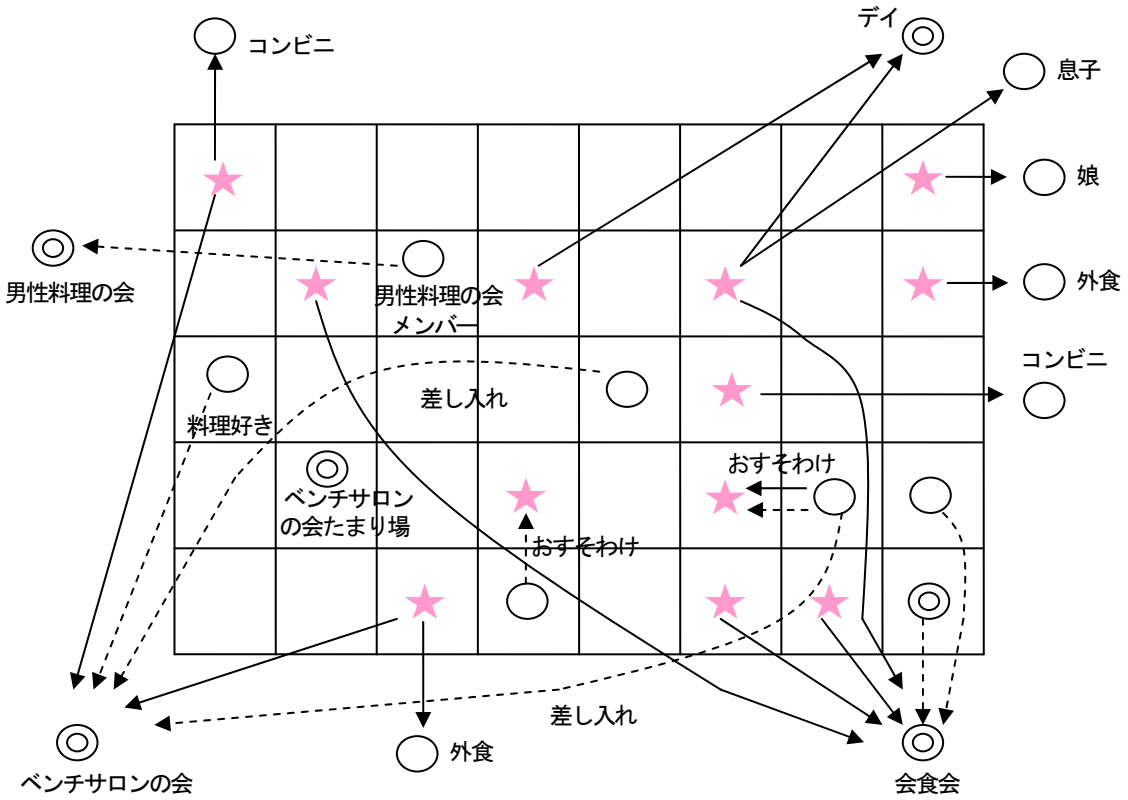
＜マップ事例８＞社会との接点は、誰にも必ずある



＜マップ事例９＞大都心の団地でもこれだけのふれあいや助け合い



＜マップ事例１０＞一つの団地内で食事のニーズと資源が



⑹豊かさのダイヤグラムに乗せてみよう。

福祉がめざすのはただ安全を守ることだけではない。その人なりに充実した生活ができることが本当の目的だ。ここに豊かさのダイヤグラムを提示しよう。これに乗せてみて、項目別に今の充足状況をチェックし、課題を抽出する。

①「以前はやっていたけど、もうやめた」という人は、それを再開させる。

②簡単に「できない」とは言わない。這ってでも畑に行きたいという人もいる。

③本人は一見やる気がなさそうだが､本音はそうでもない｡まずは強引に引っ張り出す。

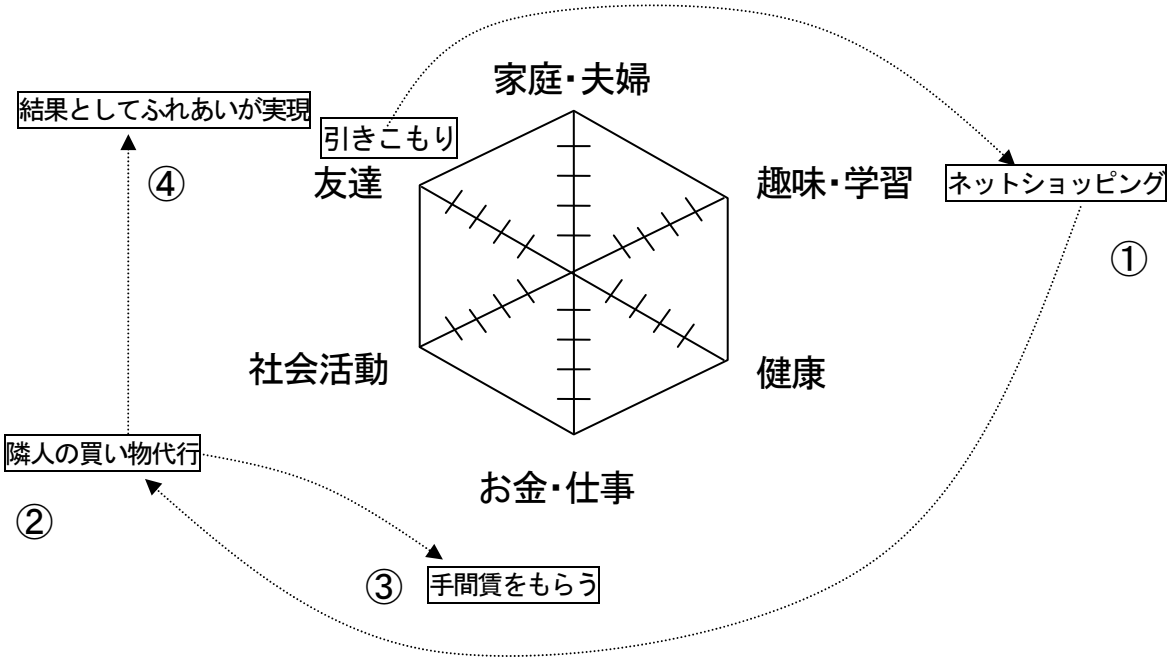
④ただ趣味があるというだけではなく、それを生かして人の役に立ち、仲間を増やし、できれば収入にもなる、という風に、六つの要素がすべて満開になるのをめざす。

⑤引きこもりの人も、付き合いづらい人も、趣味の方からアプローチすれば反応する。

⑥問題を解決することよりも、豊かさを満開にしてあげることを目指す。その結果として問題も消えていくこともある。

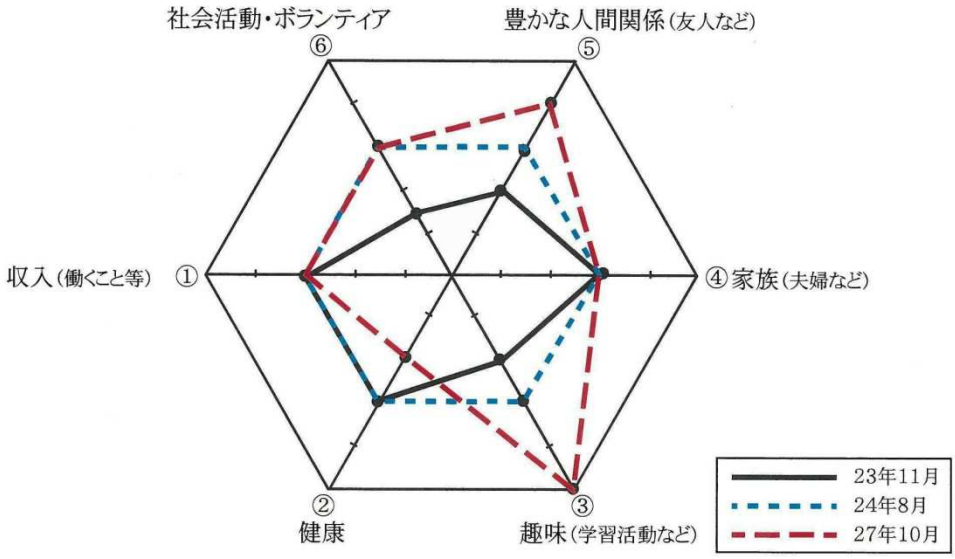
⑦豊かさ作戦・事例

ある引きこもりの女性を探っていったら、家の中で日々、ネットショッピングをしていることが分かった。ならばこれに取りつけばいい。「俺のも買ってくれないか」と声をかければ反応するかもしれない。若干の手間賃を払ってもいい。そうやっている間に自然にふれ合いも始まってしまう。引きこもりの解消は結果として実現すればいいことなのだ。



＜マップ事例１１＞担当の一人暮らし全員の豊かさダイヤグラム

事例 H･I　　一人暮らしの女性の場合（年齢79歳）



	要　件	平成23年11月	平成24年8月	平成27年10月
①	収入・仕事	3	主な収入源は年金、日頃は節約した生活　3	主な収入源は年金、日頃は節約した生活　3
②	健 康	3	何年も持病と皮膚病で通院中 3	何年も持病と皮膚病で通院中 2
③	趣味・学習	2	趣味は特になく、何とかしなければと思っている　3	市の福寿大学の合唱サークルに入り、皆と歌を習い、発表会にも参加した 5
④	家族・夫婦	3	市外に住んでいる子供は、年2回程度孫と一緒に訪問有る 3	市外に住んでいる子供は、月1回程度の訪問有る　3
⑤	友 達	2	友達は週1回位自宅に訪れる。外出は時々ある程度 3	同級生や合唱サークルの友達と交流している　4
⑥	社会活動	1	老人クラブのお世話をしている 3	町内の除草清掃に参加している 3

＊ 数字は、6角形の満足度(5段階)。数字の5は、豊かさ満開を表す。

⑵引きこもりの人

	チェックポイント
①	**本人が接触している人や所属する組織を発見できたか？** ■どんなに引きこもりでも、二人ぐらいは見込んでいる人がいる。 ■以前に交流のあった人、所属していた組織があるはず。 ■保健・福祉関係者とは接触している可能性もある。家に来ているかも。
②	**本人の様子を見守り、安否確認をしている人はいるか？** ■接触はできないが、見守るぐらいならできる。その人は誰か。 ■本人はどこかに出かけているはず。そこで誰かと接触している。それは誰か。
③	**趣味など本人がこだわっている対象はないか？** ■誰でも何らかのお楽しみを持っている。引きこもりの人も同様。 ■そのお楽しみ事に乗ることはできるし、それなら反応する可能性がある。 ■以前にその種のグループに入っていたことはないか。
④	**何か生活上の困り事はないだろうか？** ■毎日、コンビニ弁当で間に合わせていないか。ゴミ屋敷になっていないか。 ■糖尿病で食事作りに苦労していないか。 ■困りごとに対応しようとすれば、反応する可能性もある。

⑴とにかく本人のお楽しみ事を探し出せ！

前項で述べたように、引きこもりを直接解消させようという作戦はうまくいかない。本人がこだわっているものを探し出し、それに乗る方が効果的だ。だから本人がこだわっているもの、お楽しみの対象は何なのかを探る。

趣味だけではない。再びダイヤグラムを見ていただきたい。六つの項目のすべてが「こだわり」の対象になりうる。本人はこのどれにこだわっているか。

例えば、暴言暴力を振るって隣人を恐れさせている男性のこだわりの対象を調べたら、なんと子供に対してだけは笑顔を見せ、やさしい声で接触し、面倒も見るということが判明した。これは「友達」（ふれあいの部分）。

隣人とはまったくふれ合わないのに、毎日近くを五時間も歩き続けている男性が見つかった。健康にだけは強い関心を持っていた。

⑵見込まれた人を通して接触すること。

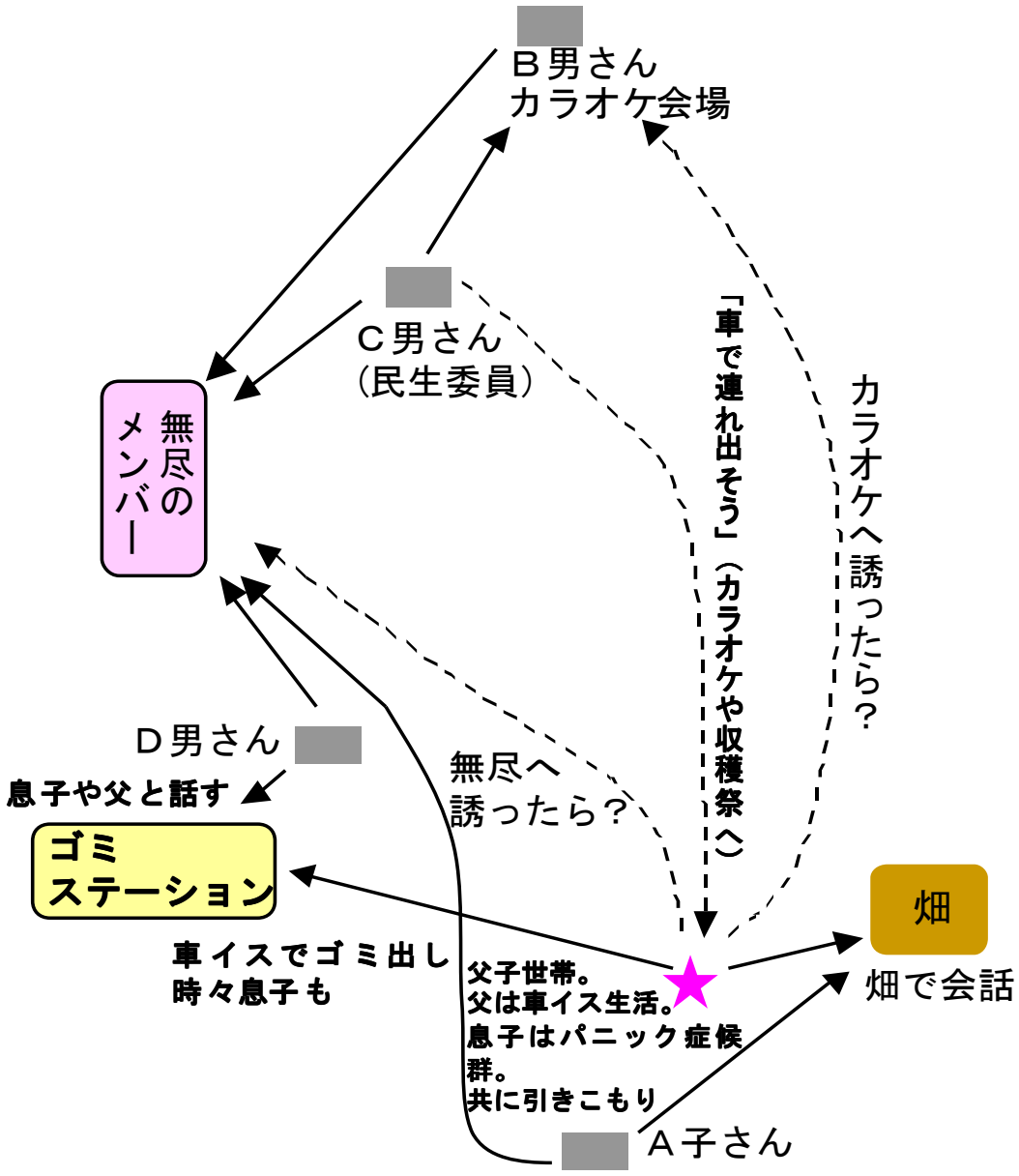
どんなに引きこもりの人でも必ず２～３人の接点が見つかる。その人を見つけたら、その人を通して接触すること（間接接触）が重要だ。担い手主導で進めてしまうと、このような人への接触はうまくいかない。担い手である私があなたに関わる人を決める、というのでは本人は承知しないからだ。あくまで地域では本人主導でいかねばならない。本人が「あなたがいい」という人を通して接触する以外に道はないのだ。

⑶ケアマネジャーやヘルパーが入っている場合、その人が仲介役を。

何らかの意味で要援護状態なら、ケアマネジャーなどのプロは入っているはずだ。そのプロがどういう役割を果たせるかを考える。住民と仲介する役を担ってもいい。枠外のニーズを把握しているはずだから、それを住民に知らせるだけでもいい。

＜マップ事例１２＞引きこもりでも２人は見込んでいた

＜マップ事例１３＞突破口はいろいろあった



⑶高齢者のみの世帯

	チェックポイント
①	**子どもが近居していないか？** ■または頻繁に通ってきているか。生活の面倒を見ているか。
②	**夫婦で、またはどちらかが引きこもってはいないか？** ■隣人を自宅に引き入れているか、いないか。
③	**夫婦の様子を見守ったり、面倒を見ている人はいるか？** ■接触はできないが、見守るぐらいならできる。その人は誰か。
④	**夫が妻を虐待していないか？** ■明らかな虐待ではないけれど、それに近い行為が行われていないか。
⑤	**夫婦共に、またはどちらかが病気、障害、要介護でないか？** ■夫が妻を介護する場合、きちんと介護しているか。周囲の支援を求めているか。
⑥	**夫婦で一緒に地域参加をしていないか？** ■特に夫が地域デビューしていないか。 ■妻と夫が同じグループに入っていないか。 ■夫婦で同じ趣味を持っていないか。
⑦	**夫は自立訓練を重ねているか？** ■料理教室に参加しているか。 ■介護教室にも参加しているか。

⑴老老介護になった時、気になること－夫が妻を囲い込み。

高齢者夫婦でも大部分は２人とも元気で何も問題ないというケースであろう。しかしその後妻が要介護になり、夫が介護せざるを得なくなった時に問題が生じる。介護はできるのか、それ以前に食事等の家事ができるのか。最も心配なのは、介護に疲れたとき周りに支援を求めることができない点だ。そこで二人とも元気なうちに、特に夫は地域グループに加入しておき、地域の人たちと仲良くしておくこと。もう一つ、妻と同じグループに属しておくこと。それができれば、妻を介護するときに周囲からの支援を拒まなくなるし、妻の知人・友人が支援に来ても素直に受け入れられるようになる。

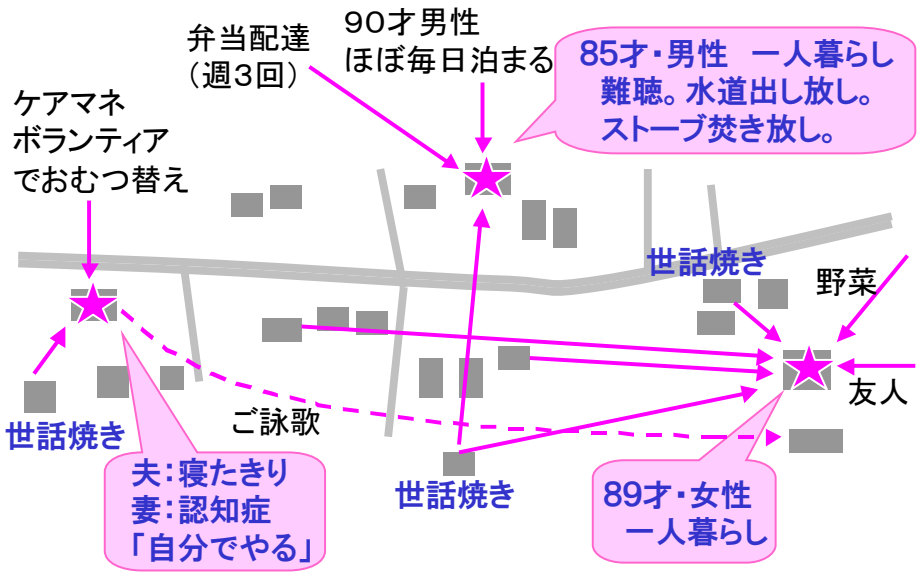
⑵あらかじめ夫に自立訓練を。

妻が先に亡くなると、夫がひきこもるケースが多い。そこで夫婦一緒の時から夫に自立訓練をしておくことが望まれる。家事全般（料理や掃除など）、庭木の手入れ、家屋の修理など。

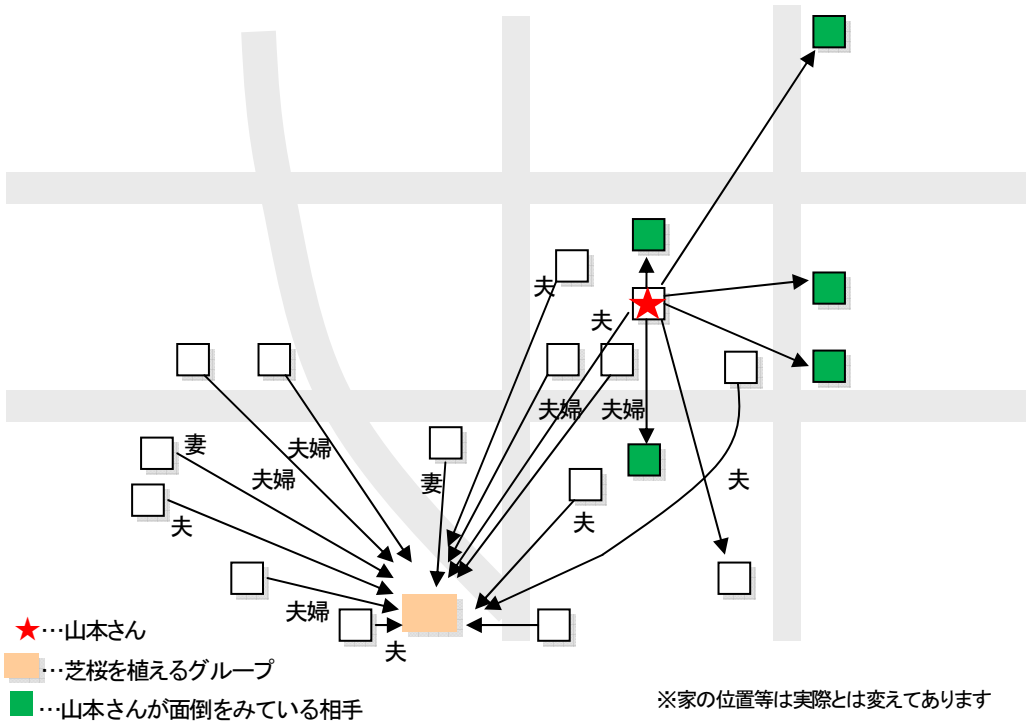
⑶家に隣人を引き入れる。

夫が妻を介護するときに必要なのは、隣人を自宅に引き入れることだ。実際に介護が始まってしまったら、それができない。二人が元気なうちに、隣人を家に引き入れることをやっておく。隣人も積極的に入っていくことが大切だ。

＜マップ事例１４＞要介護の妻を囲い込み



＜マップ事例１５＞町内ぐるみで、夫の地域デビュー



⑷要介護の母と息子の２人暮らし世帯

	チェックポイント
①	**母親が病弱または障害、要介護ではないか？** ■自分で生活の用を足せるか。息子の手伝いが必要か。 ■認知症の症状は出ていないか。
②	**息子の介護負担がきつくなっていないか？** ■この段階から虐待やネグレクトの恐れがないかチェック。 ■母親も虐待の事実を隠そうとするから、きちんと調べる。
③	**隣人が見守ったり、支援で関わっていないか** ■息子が支援の手を拒否していないか。 ■それでも息子が受け入れている人は誰か。
④	**地域のグループに参加していないか？** ■ミニデイなどに母親を参加させていないか。 ■息子も受け入れられていないか。 ■同じ状況の人(息子同士)と接触しているか、グループに参加していないか。
⑤	**母および息子、それぞれのお楽しみは？** ■介護のストレスを発散させる趣味などがないか。 ■地域のお楽しみのグループに参加していないか。
⑥	**息子が仕事を持っているか、母の年金頼りか？** ■母が亡くなった後、生活はどうするのか。 ■今までの仕事は続けられないのか。介護中でもできる仕事はないか。

⑴母親が要介護になった時、「虐待」の危険が。

母親が元気なうちは、息子の負担も少ないから心配ないが、母親が要介護になったり、特に認知症になると虐待の危険が出てくる。母親は虐待されていることを隠すので周りもわかりづらい。ご近所の断片的な情報を合わせると虐待の事実が浮かび上がって来る。

⑵まず母親を地域に引っ張り出す。

母親と息子が狭い、密室の空間で、一日中いるから危険が生まれてくる。そこで母親

をサロンなり、ミニデイに引っ張り出すことが必要になる。息子は母親を出さないようにするが、あきらめてはいけない（母親を閉じ込める権利はない）。場合によっては毅然とした態度をとるべきである。サロンに息子も参加させることができれば、もっといい。

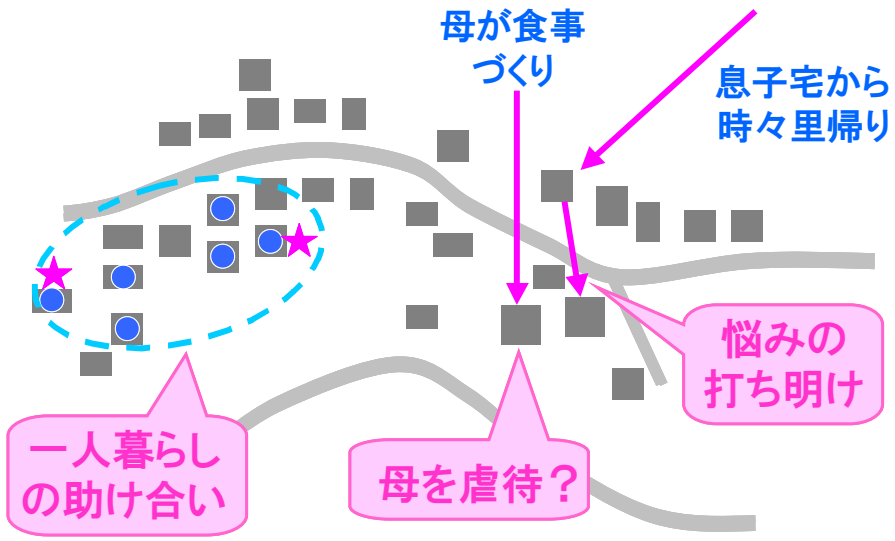
⑶息子の仕事づくりの支援も。

母親の介護のせいで息子が仕事を失うのは不合理だ。彼の仕事づくりで、できるだけのことをする必要がある。今までの仕事はどうなったのか。介護をしながら続けられないか。介護をしていてもできる仕事はないのか。地域で提供できる仕事はないのか。

⑷せめてストレス解消にお楽しみづくりを。

息子のストレスも溜まっているだろう。彼の元々の趣味は何だったか。それを介護中でも続けられないか。続ける方法を考えよう。同じお楽しみを持った仲間はいないか。

＜マップ事例１６＞町内ぐるみで、夫の地域デビュー



⑸高齢者施設入所者

	チェックポイント
①	１つのご近所内で何世帯の人が高齢者施設に入所しているか？ ■五十世帯のご近所で平均３～５人が一般的。 ■入所者が異常に多い場合はその理由・背景を探る。 ■近くの施設に入所しているか、もっと遠い施設に入所しているか。 ■「空き家になっている家」の中にも施設入所者がいる。
②	家族や近所の知人や友人が施設を訪問しているか？ ■自宅から近くの施設か遠い施設かによる。 ■本人が訪問を求めているか。
③	ときどき「里帰り」ができているか？ ■施設がこれを応援しているか。 ■家族が里帰りに協力的か。 ■里帰りした事例はないか。
④	近所のグループやサロンに受け入れられているか？ ■自宅でなく地域のグループに里帰りしているか。 ■グループが受け入れに協力的か。
⑤	「いずれ自宅復帰」を家族は考えているか、本人の意向はどうか？ ■施設は自宅復帰に協力的か。 ■施設生活と在宅生活を交互になど、新しい方法はないか。

⑴入所したら「一件落着」ではない。

本人が施設に入所したら、ご近所の人は「一件落着」と思ってしまう。家族も、民生委員も、ケアマネジャーも。しかし誰でも住み慣れた自宅や地域で生きていきたい。それが叶わなくなった人に対してできる事は、せめて里帰りである。あるいは地元のグループに参加できること。これをどう実現できるのかを真剣に考えなければならない。

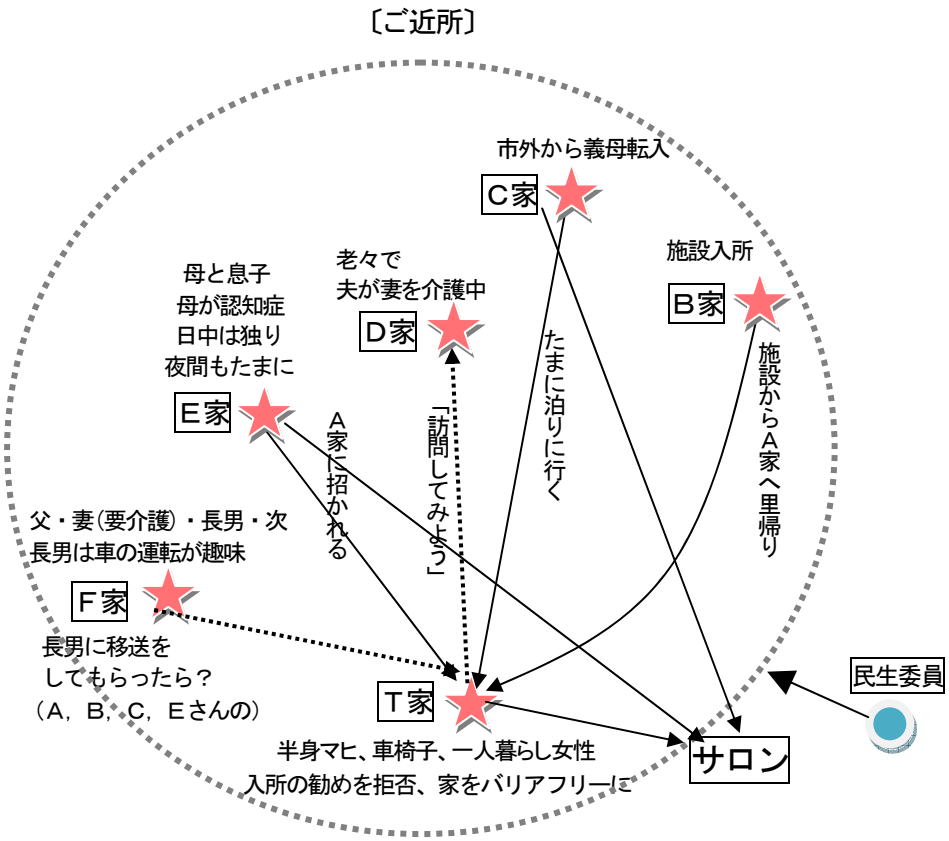
⑵「そろそろ入所」の話が出ている家はあるか？

既に入所してしまったら、また自宅に戻るというのは極めて難しくなる。まだ在宅だが、そろそろ施設入所の話が出ている家、というのがある。この人を入所させずに済む

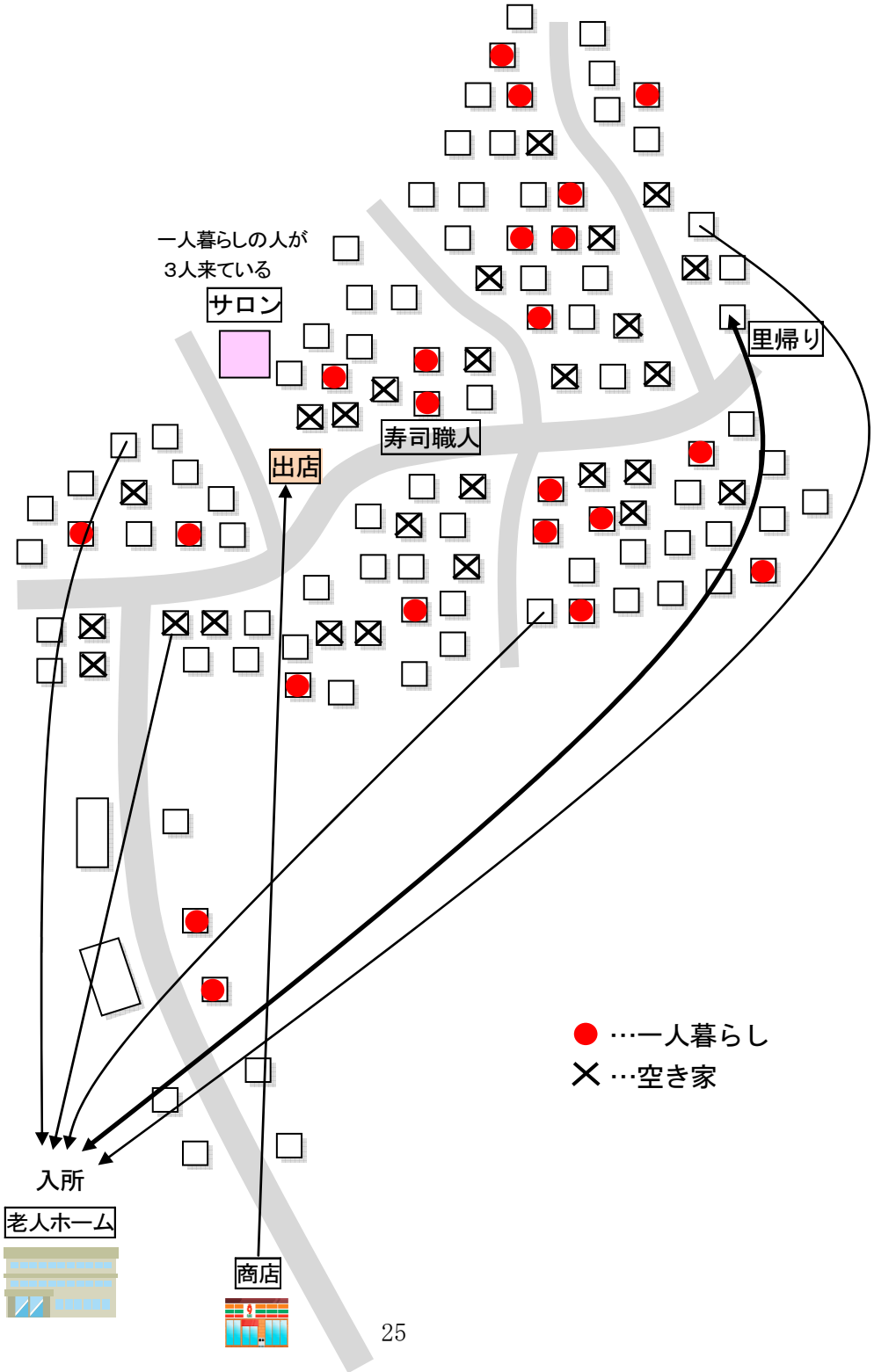
にはどうしたらいいかを考えるのも大切なことだ。

入所の動機は様々だが、要介護度が進んで、在宅は事実上無理という人もいるが、まだそれほどにはなっていないけれど、早めに入所しておこうという人もいる。地域が支えてくれないから仕方なく入所しようというわけだ。この人をどう支え続けるかだ。

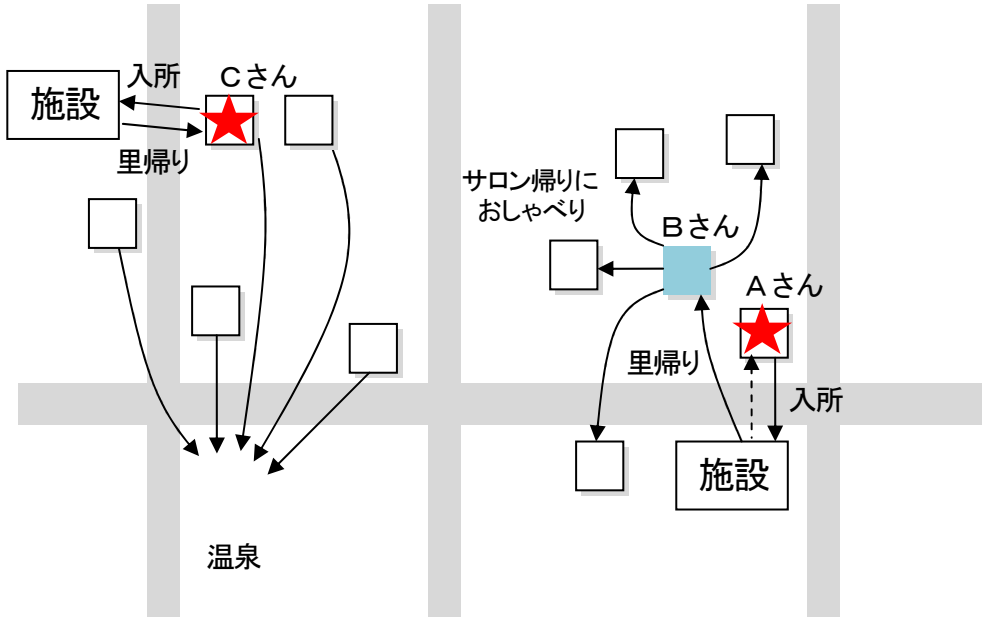
＜マップ事例１７＞要介護者宅が里帰りの受け皿に



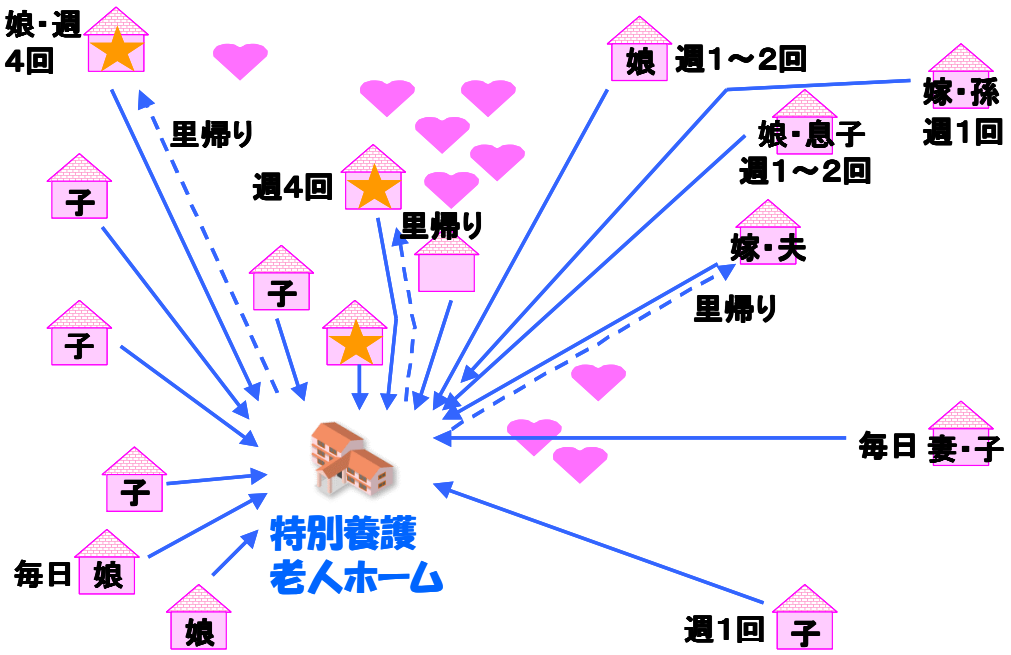
＜マップ事例１８＞地域密着の老人ホームだから逆デイも



＜マップ事例１９＞里帰りが地域で広がった



＜マップ事例２０＞老人ホームが自宅から近くにあると…



⑹デイサービス利用者

	チェックポイント
①	１つのご近所で何人がデイサービスを利用しているか。 ■一つのご近所（５０世帯）で４～５人が一般的。 ■これより多いと、その理由や背景を考える必要がある。
②	一人ひとりのデイサービス利用の理由を調べてみよう ■「入浴ができない」等純粋に福祉的な理由か。 ■「地域がつまらないから」といった他の理由か。
③	地元のグループやサロンに受け入れられているか？ ■デイを利用するようになると、地域グループやサロンが受け入れなくなる。 ■受け入れてくれなくなったから仕方なくデイを利用するという人もいる。
④	利用しない日にも事業所は何らかの関わりをしているか？ ■デイを利用するのはわずかに週に一回か二回。ほとんど地域にいる。その人に地域で関わることができないのか。それ次第でデイ利用が不必要になる。 ■デイ利用者が地域でも交流していないか。それを施設が応援していないか。
⑤	デイサービス利用者と地域グループの交流を仲介していないか？ ■利用者がサロンに受け入れられるよう働きかけるとか。 ■デイ利用者の枠外のニーズをご近所の人に伝えて協力を求めるとか。
⑥	地域社会でミニデイサービスを実践してはいないか？ ■利用者が畑仕事が好きなら、それをデイのメニューに入れられないか。 ■利用者の日常活動や趣味をデイのメニューに入れられないか。

⑴地域が貧しいとデイが繁盛する？

デイ利用の理由で「地域がつまらないから」というのが、少なくない。サロンや井戸端会議があちこちで開かれていたり、趣味活動が盛んなご近所ではデイサービスの利用者は少ない。逆にそういう活動がない地域では要支援の人はデイを利用するようになる。

⑵サロンや趣味グループに受け入れられている利用者はいるか？

たいていは排除されているので、むしろ受け入れられている人がどのようにしてそれ

が可能になったのかを調べてみよう。「要支援」の人が地域のふれあいの輪に入れてもらえれば、それが生活支援になる。

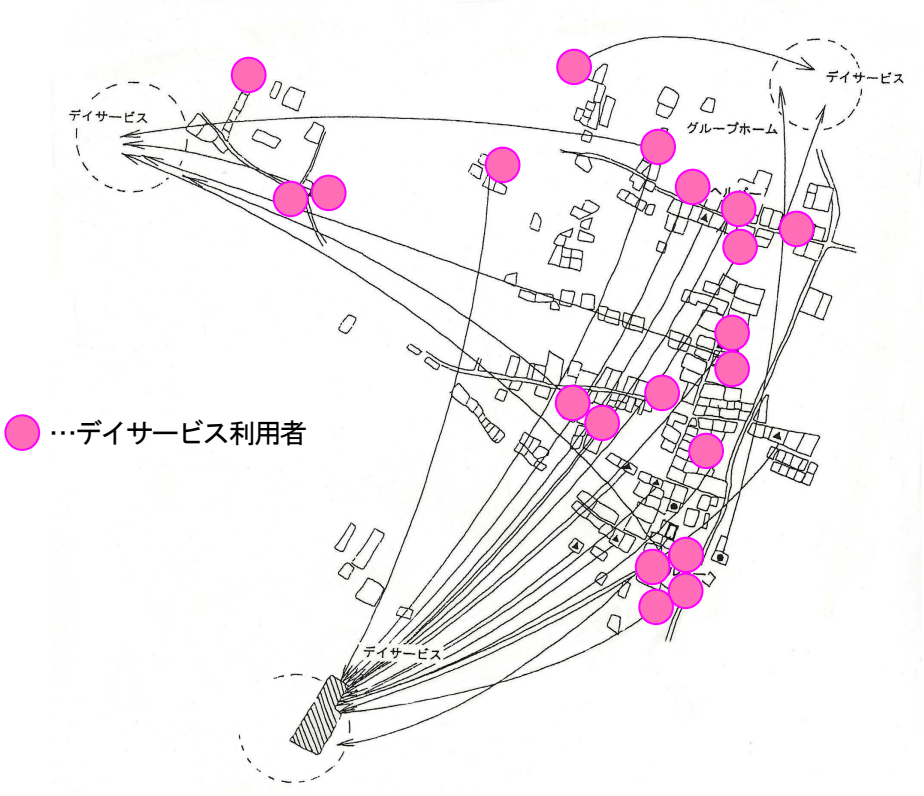
⑶デイサービスが利用者の生活支援をする方途は？

デイサービスがチェックポイント④や⑤、⑥といったサービスをしている事例はまずない。デイサービスセンターにそういう発想がもともとない。これが可能になる方法はないかを探ることが当面の課題になる。 そのヒントになるものはないか？ 例えばデイサービスボランティアで、それらしいことをしている人がいないか？

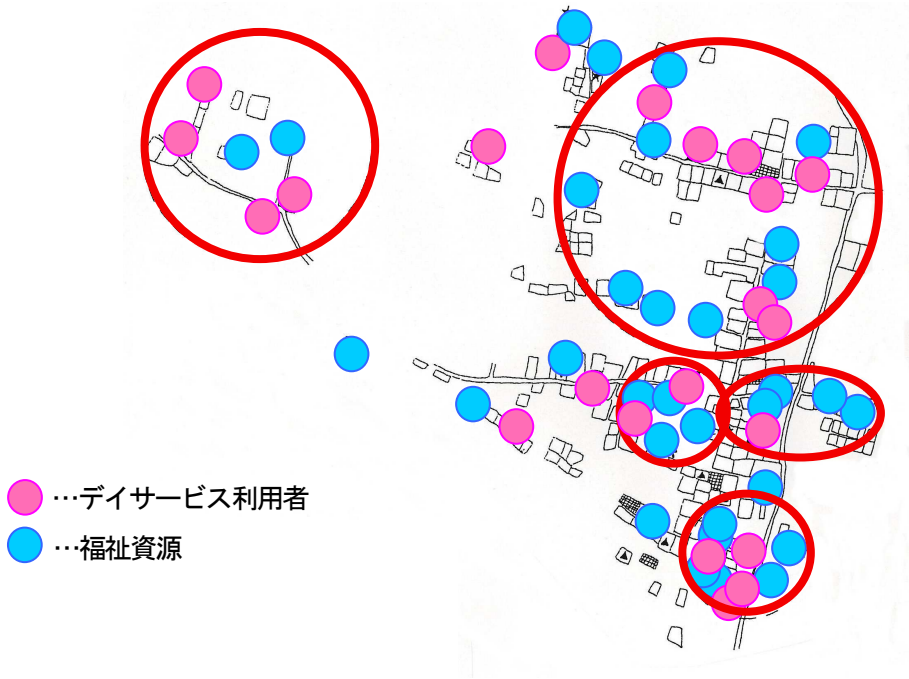
⑷住民によるミニデイを応援したり、デイの出前をやったりは？

ご近所でミニデイをしていないか。それをデイサービスセンターが支援していないか？ デイサービスセンターがサテライトデイ（出前）をご近所に出かけてやれるか？

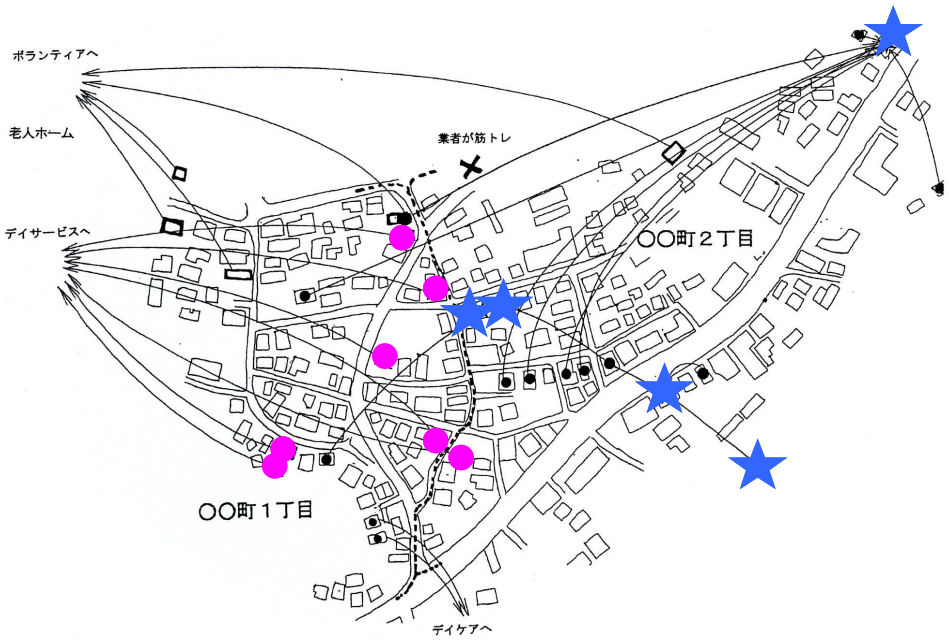
＜マップ事例２１＞一つのご近所でこんなに多数のデイ利用者



＜マップ事例２２＞こんなに多数の福祉資源があるのに…



＜マップ事例２３＞なぜ１丁目だけにデイ利用者？



＜マップ事例２４＞サロンにデイ利用者は参加していなかった

⑺在宅の要介護者

	チェックポイント
①	**ご近所が介護者を支援しているか？** ■どんな支援をしているか。 ■それ以前に家族はご近所の支援を受け入れるか。
②	**ご近所で介護している人同士が助け合っているか？** ■悩みを言い合う程度でもいいから、やっているか。 ■それを応援したり、仕掛けている住民はいないか。
③	**要介護者の豊かな生活を支援しているか？** ■介護者の豊かな生活支援も同様に。 ■地域グループが介護者や要介護者を仲間に受け入れていないか。
④	**要介護者を地域活動に参加させているか？** ■豊かな生活支援の一環で、趣味活動などに参加させているか。 ■同様に介護者の地域参加も。
⑤	**ケアマネが枠外のニーズでご近所の協力を求めているか？** ■同様にヘルパーも。 ■同じご近所に住むヘルパーがそういうことをやっていないか。
	ご近所の元看護師が介護家族の相談に乗っていないか？ ■同じご近所に住む元看護師が介護家族の相談に乗っているケースが散見される。その事例はないか。 ■介護経験のある主婦がご近所の介護家族に関わっているケースはないか。

⑴だれかが介護者支援に動いている。それを探せ。

在宅で介護している家族に、ご近所の人が支援に入っているケースはほとんどない。介護者自身が閉じているせいもある。それでも丁寧に探せば、実践者が見つかるはず。その人は何をしているか、なぜ可能になったのか。これからは要介護者が爆発的に増えてくる。なのに「介護家庭」はパスというのでは、福祉のまちとは言えない。

⑵「ひらいた家族」をさがせ。そこを突破口に。

まず介護者がオープンになるかがカギになる。そういう家庭が１軒はないか？ そこを

突破口としてご近所中に広げていけばいい。

⑶ご近所の介護者どうしがつながっていないか？

一種の自助グループの萌芽が見える場合もある。グループとして目に見える形でなく、介護者がどこかの家や店などで悩みを言い合っているというのなら、あるはずだ。

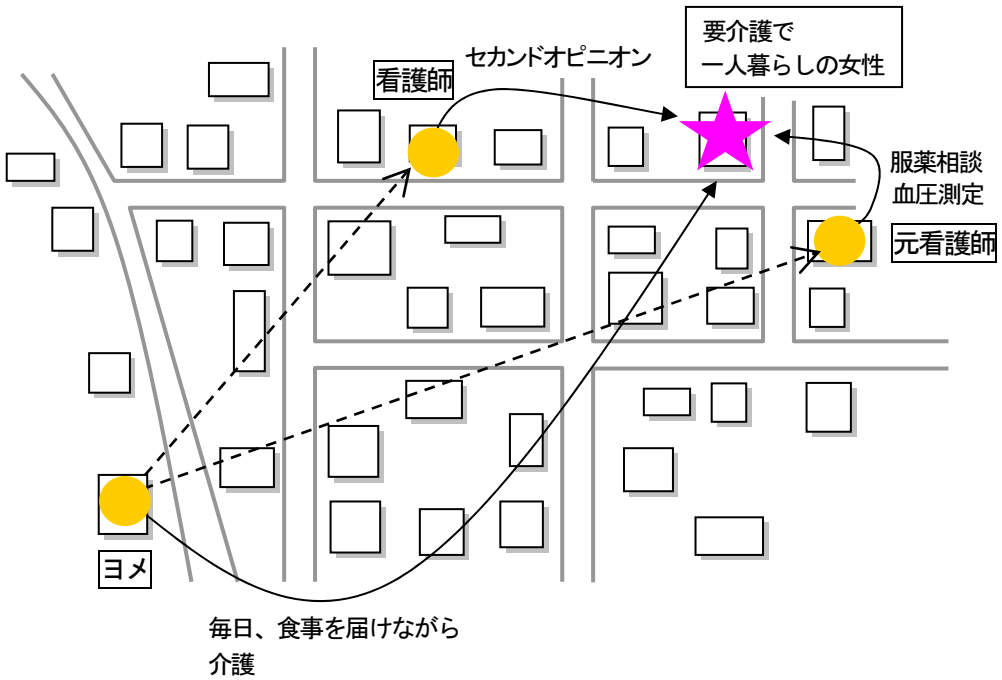
⑷介護経験のある人たちが何等かの行動を取っていないか。

肉親を介護した経験のある人や、元看護師、ヘルパーなどを合わせると一つのご近所に１０名ぐらいいるはず。この中の誰かがご近所で介護支援や相談活動をしているはず。

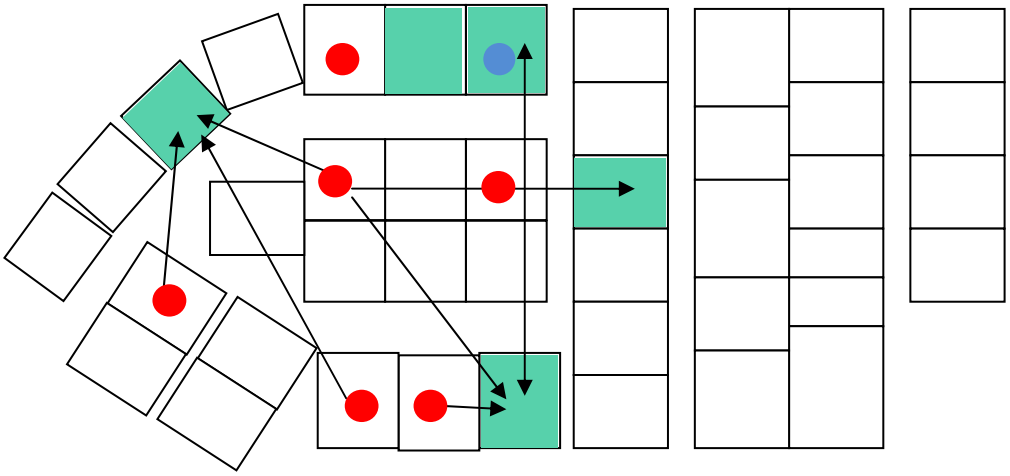
⑸要介護者も「その人らしく」生きられるよう。

介護と「その人らしい生活」にどんな関係があるのかと考える人が多いのではないか。要介護になったら専らどんな介護をするかが関心事になるのは当然として、それでもその人なりに自身のライフスタイルを全うしたいと願っているはずである。それが可能になるヒントをマップ作りの場でも探さねばならない。

＜マップ事例２５＞ご近所内の元看護師を活用していた

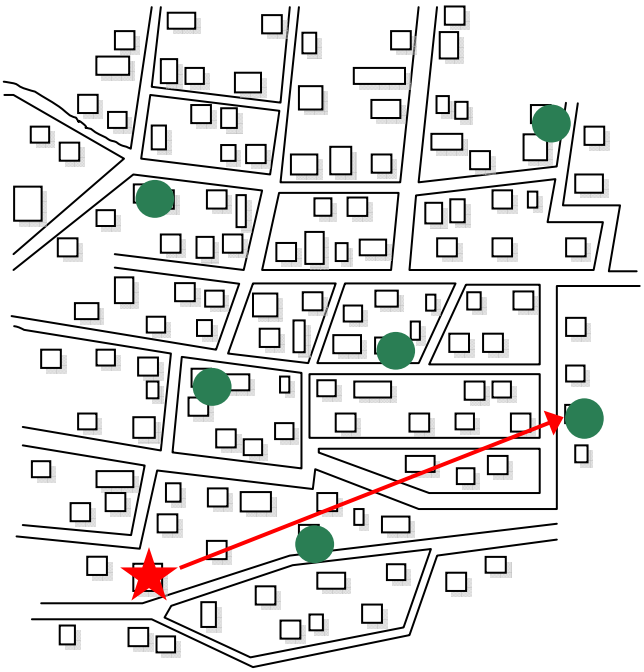


＜マップ事例２６＞介護家庭をＯＢ達が支援していた



…介護中の家庭（線は関わる人）。介護経験者●がサポートしている。
●は元看護師。

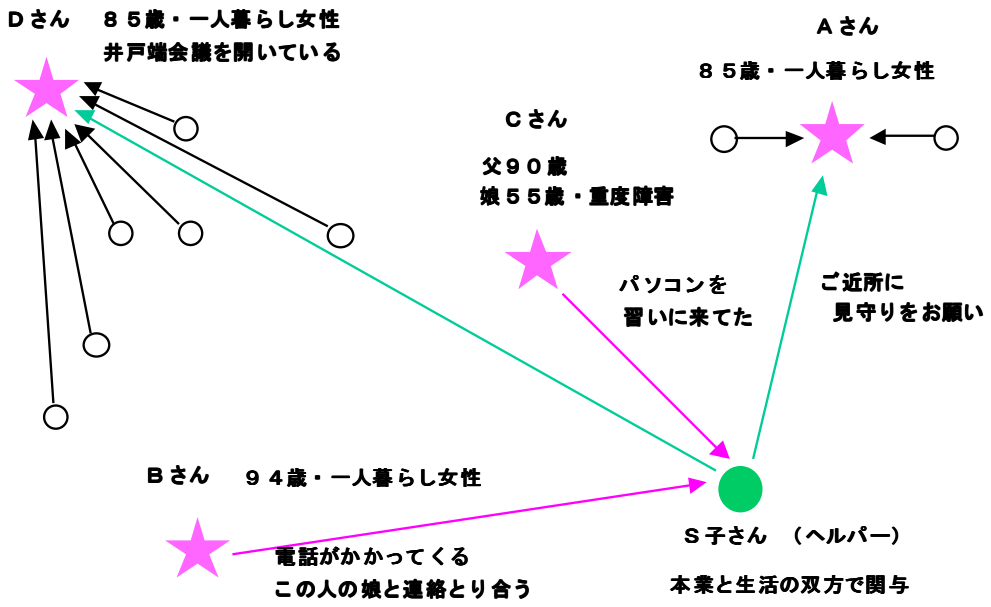
＜マップ事例２７＞現役の介護者がご近所の現役を支援



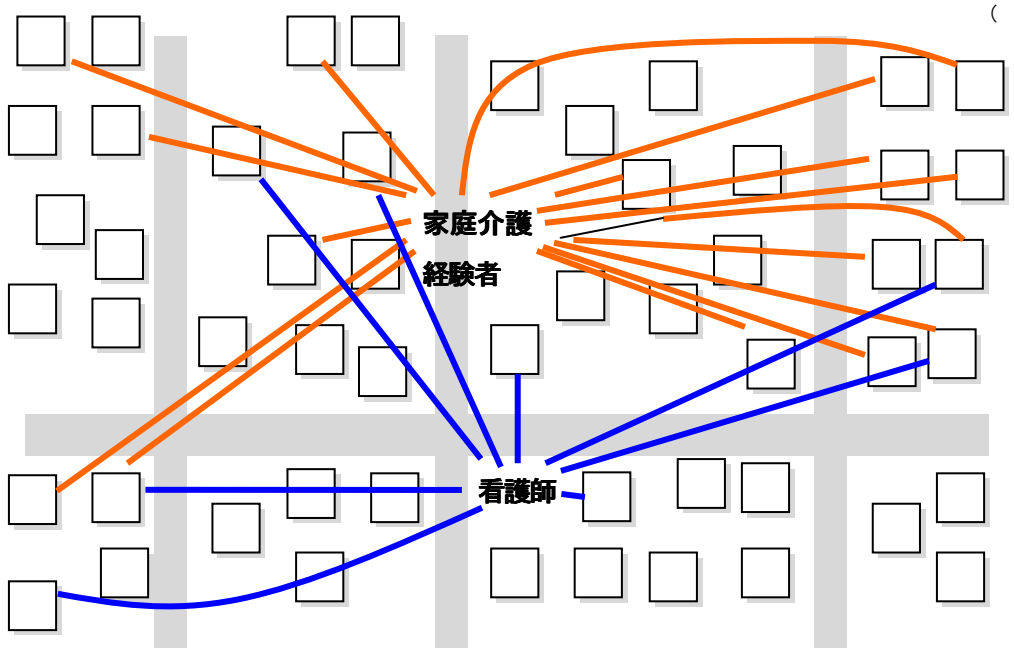
・・・ 昭和２４年生まれで、高齢の母親を介護している男性

・・・ 介護パートナーの女性

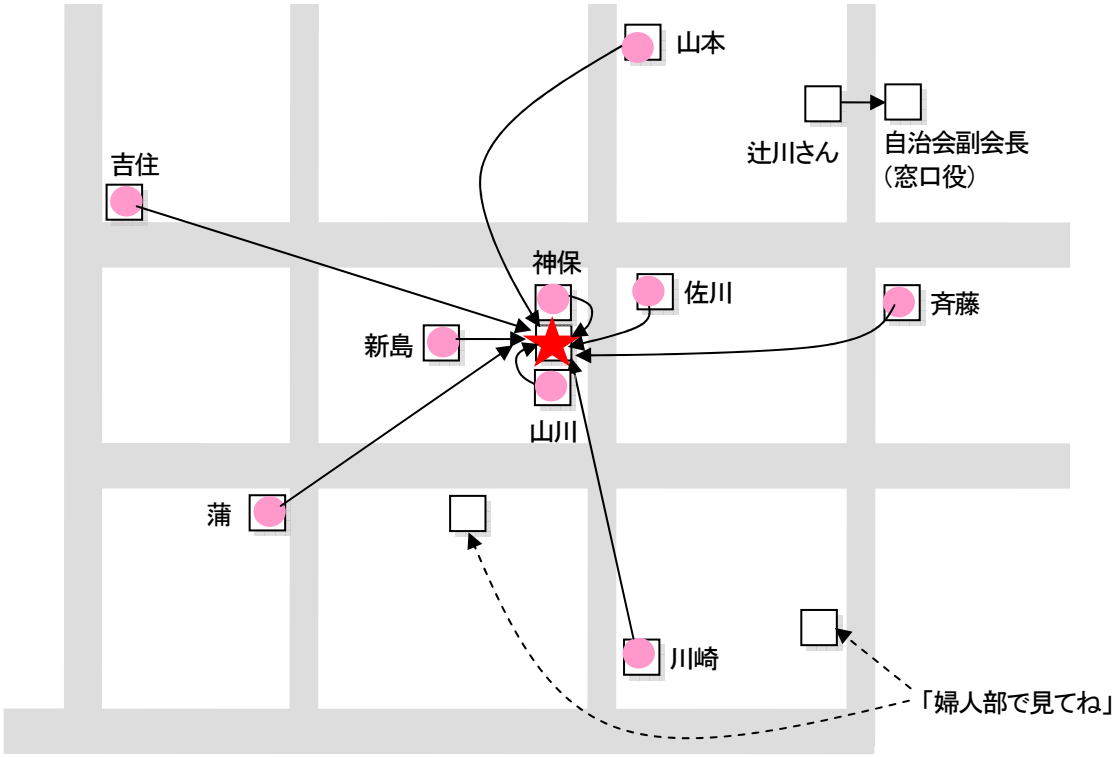
＜マップ事例２８＞ご近所密着ヘルパーがご近所さんを頼りに



＜マップ事例２９＞ーご近所に介護のプロと介護経験者がこんなに



＜マップ事例３０＞ご近所ケアでご近所さんとプロが協働



⑻認知症の人

	チェックポイント
①	**認知症のことを家族はオープンにしているか？** ■本人はどうなのか。 ■周りの人は気付いているか。
②	**認知症の人・家族にご近所は積極的に関わっているか？** ■どんな関わりをしているか。 ■誰と誰がどのような関わりをしているか。
③	**徘徊中の認知症の人を見守ったり、受け入れる家（店）はあるか？** ■その人たちはどのような関わりをしているか。 ■認知症の人の居場所を作っている人はいるか。 ■認知症の人の見守りのネットワークができているか。
④	**認知症の人をサロンやゲートボール等に受け入れているか？** ■認知症の人が積極的に参加しようとしているのか。 ■またはグループが積極的に受け入れようとしているのか。
⑤	**認知症の人同士、家族同士で交流したり助け合っているか？** ■それを応援、支援する人やグループがあるか。

⑴身内の認知症をオープンにしているか？

身内が認知症であることをオープンにし、積極的に協力を求めているケースはないか調べる。この家を突破口にして、ご近所中に広げていけばいい。これがまだできない地域だと、助け合いの可能性はそれだけ遠ざかる。

⑵認知症をタブー視したり、迷惑がる雰囲気がないか？

マップづくりの場で「認知症」をまだタブー視する雰囲気があるか？ 認知症の人がいる家を指すのを躊躇しているか？ もしそうだとすれば、そこから議論をしなければならない。また認知症の人の存在を迷惑視する傾向はないか？ これを克服するために打つべき手は？

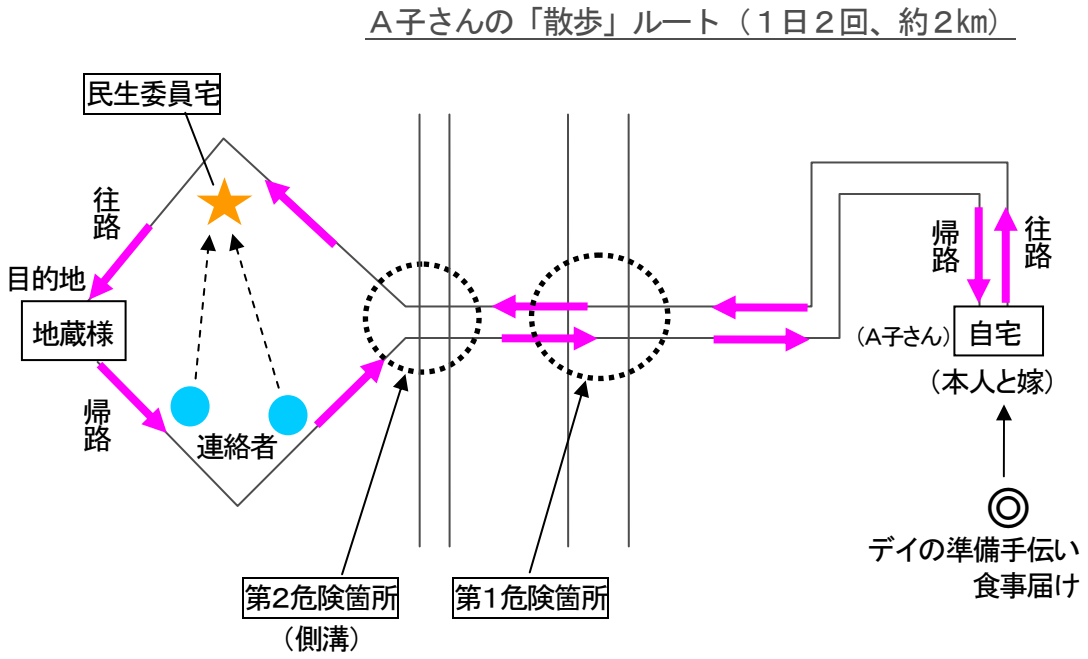
⑶認知症本人にとっての庇護者は？

本人に接触する人のすべてが理解者になればベストであるが、現実はそうはいかない。その時に大事にすべきことがある。本人は、地域を歩き回りながら、自分にとっての庇護者を探し求めている。本人が見込んだ相手を探すのだ。

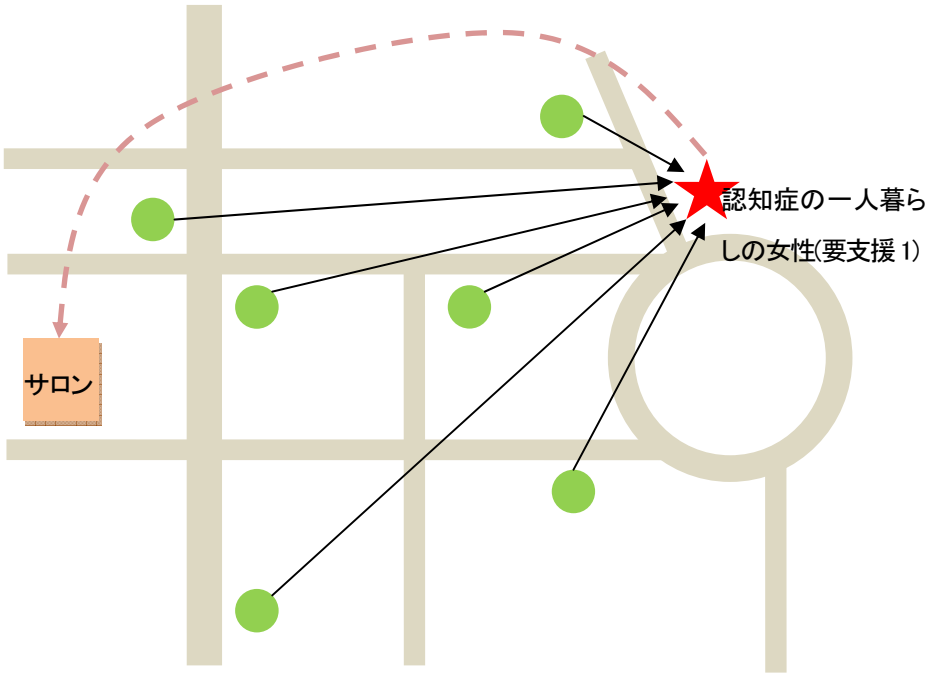
⑷認知症サポーターにふさわしい人を探せ。

マップ作りの場で「この人はサポーターの研修を受けた」という人はまず見つからない。その代り、ご近所内にこの資質を持っている人がいるはずで、その人を探せばいい。その人は足元でどんな役割を果たしているかを調べ、改めてサポーターの研修を受けてもらうのだ。この方が実質的なサポーターを確保できる。

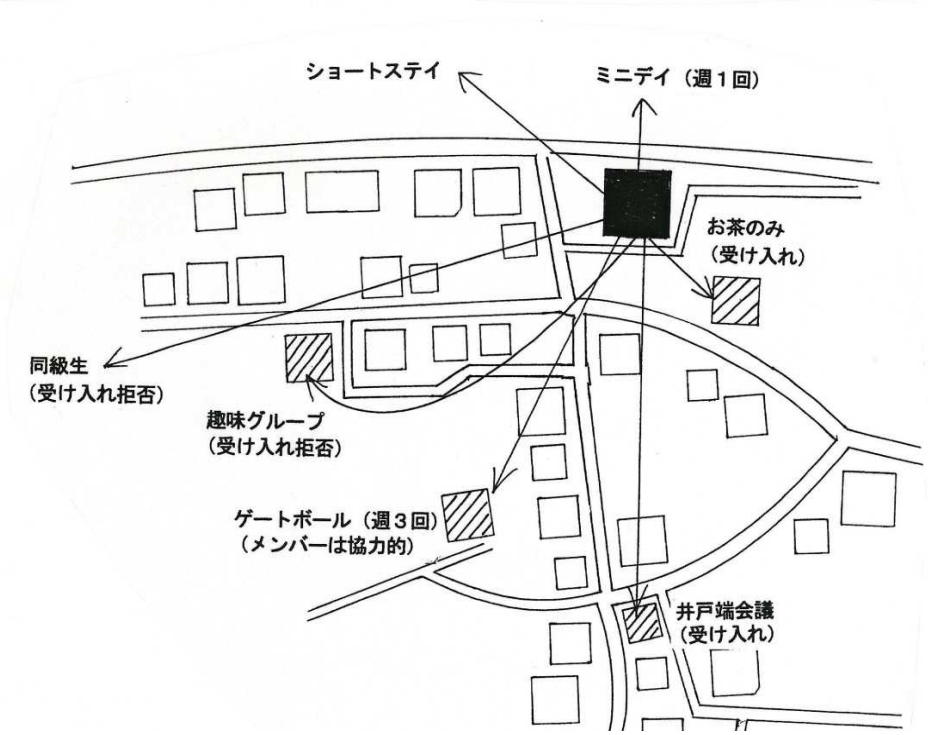
＜マップ事例３１＞徘徊ルートを徹底的に洗え



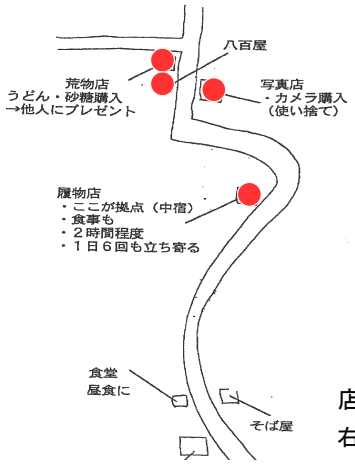
＜マップ事例３２＞認知症宅へ押しかけサロン



＜マップ事例３３＞「私も入れて！」



＜マップ事例３４＞認知症の人に見込まれた人や店



店の奥では高齢者たちが井戸端会議。認知症の人も仲間入り。
右端が店主の井上さん。認知症の人を毎日面倒みている。

⑼障害児者

	チェックポイント
①	**家族は障害を持つ子どもを隠したがっているか？** ■普通の学校に通わせているか。子ども会に入れているか。 ■地域グループに参加させているか。
②	**ご近所の人と交流ができているか？** ■ご近所の人を家へ迎え入れているか。 ■ご近所の人もその家を訪問しているか。
③	**障害を持つ人同士、ご近所で交流しているか？** ■親同士のグループもできているか。 ■ご近所ごとにセルフヘルプグループができているか。
④	**地域のグループに受け入れられているか？** ■こちらは地域の側の姿勢を問うている。 ■子ども会は障害児を受け入れているか。 ■青年団、消防団などにも受け入れているか。
⑤	**周りの人や関係者が本人のお楽しみや能力を開発しているか？** ■開発した能力が収入にもつながっているか。 ■地域の企業や学校、障害児施設等がその才能を活用しようとしているか。 ■芸術家などが障害児の能力開発に動いていないか。

⑴ご近所とのつながりの線が１本でもあるか？

障害児者を支え合いマップにのせてみると、ご近所とのつながりの線がほとんど引けない。事態は深刻である。だからまず、その家庭とご近所がつながっているケースがあるかどうかを探るのが先決。見つかったら、それがどのように可能になったかを調べる。

⑵子ども会などに受け入れられていないか？

障害児は地元の子ども会にも受け入れられていない場合が多い。このことは外国人の子についても言える。たまたま受け入れられている事例が見つかったら、それがどのようにして実現したのか、その理由を探る。子ども会に限らず、町内会活動等も同様。

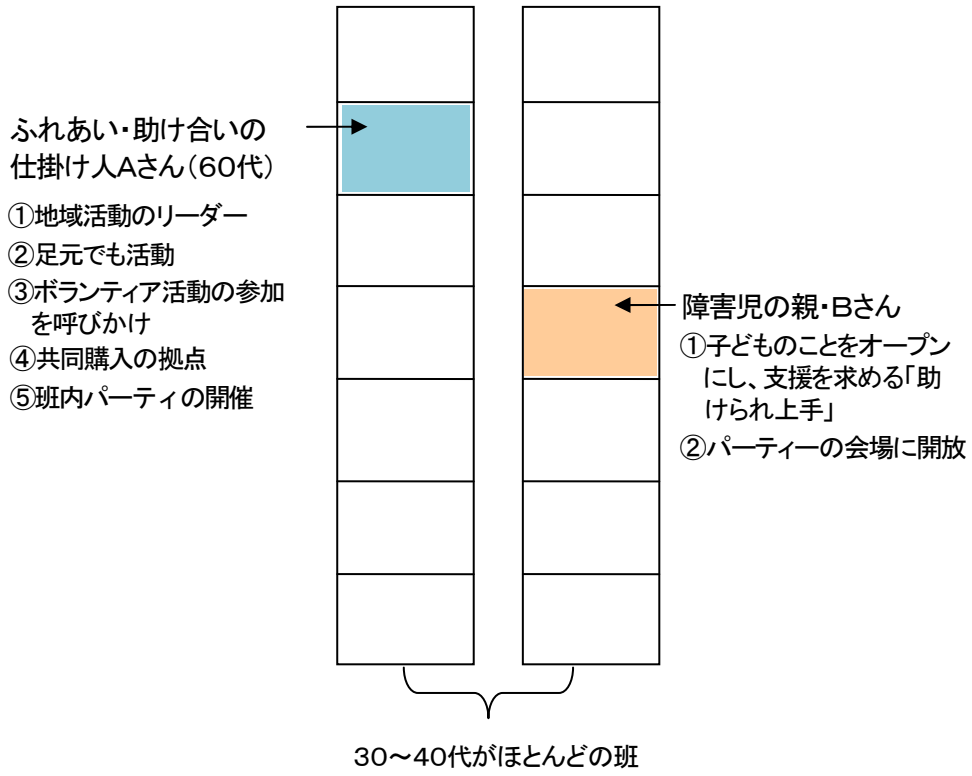
⑶「ご近所雇用」の可能性はないか？

大事なことは、その障害児者の仕事をどう開発するかである。あるご近所では、知的障害の男性に、各家庭が耕作や草取りなどの「仕事」を依頼していた。ご近所雇用である。こうした支援の可能性はまったくないか？

⑷グループホームなどの施設とご近所の関係は？

ご近所にグループホームや授産施設がある場合がある。その授産施設等の関係者が本人とご近所の仲を取り持つ事例はないか？ その可能性はまったくないか？

＜マップ事例３５＞障害児を抱えた家が開くと…



⑽「“迷惑な”住民」

	チェックポイント
①	**ゴミ屋敷、騒音を出すなどご近所に迷惑をかけている人は？** ■暴言を吐く。「お金を貸してほしい」と来る。鉢植えを道路に並べる。ラジオを大音量で聞く。 ■その人に上手に対応している人はいないか。そしてその方法は?
②	**その人に接触できている人、その人が見込んでいる人は？** ■その人と接点にいる人は誰と誰か。 ■日常生活で必ず出会う人は誰と誰か。 ■その人はなぜ本人に見込まれているのか。
③	**その人は何に困っているか？ 生活福祉課題は何か？** ■困りごとの解決を本人が周囲に訴えたことがあるか。 ■かつてその問題解決に関係者が関わったことがあるか。その人は誰か。 ■これまでの関わりではどういう成果が出たか。
④	**その人がこだわっていること、楽しみ事は何か？** ■その人と同じ楽しみ事を持っている人はいるか。 ■そのグループに以前、参加していたことがあるか。

⑴「迷惑な人」も「人間らしく生きるのを阻まれた人」と。

私たちは、「ゴミ屋敷」に住んでいるような人を「困った人」とだけ見ている。迷惑な住民、という意味である。しかし、その人にもそうなる事情があるはずだ。「福祉」の世界では「迷惑な人」という考え方はない。それらの人も含めて「人間らしく生きるのを阻まれた人」がいるのみである。だから一人の要援護者として「救済」策を講じなければならない。マップづくりの場でそういう風に見方を変えていかないと、対応策は出てこない。

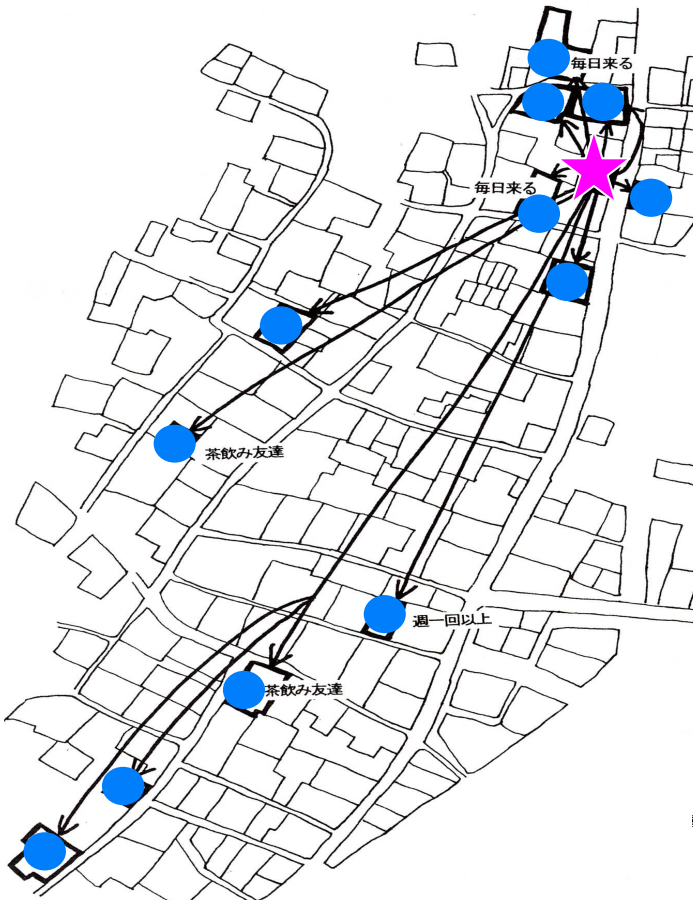
⑵その人の側から、解決策を考えてみる。

その人の側から見て、どんな問題が解決されれば「困った」状態を解消できるのか―それを探る必要がある。だれの言うことになら耳を傾けるのか―その人と接点になっている人を探すこと。意外なことに、ケアマネジャーやヘルパーなどが入っているかもしれない。その人がご近所との仲を仲介できないのかを考える。

⑶本人がこだわっていることに乗ってみたら？

　このことにはこれまでにも何度も触れている。本人は何かにこだわっているはずだ。本人が夢中でやっているそのことに乗るのだ。私たちはどうしてもその人の問題に執心しがちであるが、本人はそのことには触れてもらいたくないと思っている。ならば、そうしてあげようではないか。本人のお楽しみに乗っているうちに、自然に問題の方も解決するのではないか。

＜マップ事例３６＞迷惑を甘んじて受け入れる人たち



⑾その他の「気になる人」

	チェックポイント
①	**子どもに引き取られて行った人は？** ■特に要介護になって引き取られて行った場合、誰が介護しているか？ ■新しい地域で孤立していないか。 ■元の家に里帰りができていないか。戻れないか。
②	**昼間一人暮らしの高齢者はいるか？（特に要援護状態）** ■とりあえずは、一人暮らし高齢者の項の中で考える。 ■この人以外にも、子供が不定期に戻っているケースなどがある。 ■同居している人がいるのかいないのか判然としないケースもある。 ■同居していても、別棟に住んでいて、親の生活状況を把握していない子供も。
③	**夫婦で別々の施設へ入所させられている人は？** ■ケアマネ等の都合でそうなってしまったのか調べる必要がある。 ■または夫婦の一方が自宅で一人暮らしというケースも。 ■もっと夫婦の立場から考えてみる必要がある。
④	**高齢になって（畑）仕事も楽しみもやめさせられた人は？** ■その結果、早々と認知症になったというケースもある。 ■家族の意向で「悠悠自適」を強制されるケースが少なくない。 ■本人の立場から「その人らしい生活」を考えてあげる必要がある。
⑤	**次々と介護の役割が巡ってきている主婦は？** ■大事な時期が介護で埋まってしまっている人の人生をどう考えるのか。 ■その人の介護支援をする仲間はいないのか。
⑥	**障害のある子どもを複数人抱えて年金暮らしの女性は？** ■子どもたちが母親の年金で暮らしているというケースが増えている。 ■しかも子供の複数が障害児者や引きこもりというケースも。 ■豊かさのダイヤグラムで全員の能力を総ざらいし、対策を考える必要がある。
⑦	**もう 50 代になった未婚の男性は？** ■むろん結婚するかどうかは本人の意思だが、ご近所に十数名もいる場合も。 ■結婚したいけどできない場合、せめて異性と交流できる機会は作れないか。

⑴そのご近所に特有の「気になる人」は？

例えば、前述の未婚の男性がご近所に十数名もいるというケース。婚活というよりは、異性との自由な交流ができないかといった別の課題が出てくる。デイサービスに行っている人が一つのご近所に十数名もいる場合は、彼等のことを考えてあげる必要がある。

⑵推進者や家族の目でなく当人の目から見る。

推進者や家族の側から見たら「気になる人」にはならないというケースが少なくない。その人を当人の側から見直したとき、「気になる人」になって来る。「息子に引き取られた人」は一般的には、まわりからは「よかったね」と喜ばれるだろう。しかし本人は「泣きの涙で」息子のところに行っているかもしれない。嫁に面倒を見てもらうというのは、いつまで続けられるものなのか。嫁に介護力がなくなった今、姑の置かれた位置は微妙である。

⑿ふれあいのご近所づくり

	チェックポイント
①	**ご近所の各所で井戸端会議が開かれているか？** ■それぞれの井戸端会議に参加している人は。 ■ゴミステーション、自宅、畑、辻など。 ■そこに要援護者も受け入れられているか。
②	**お互いに自宅を開放しているか？** ■人を家に入れる地域か、入れない地域か。 ■要介護者のいる家はどうか。
③	**有志たちでふれあいサロンが開かれているか？** ■ご近所ごとに開かれているか。 ■そこに要援護者も加えているか。 ■町内圏域のサロンではご近所ごとに二次会が開かれているか。 ■そこで出された福祉ニーズに対応しようとしているか。
④	**要援護者宅でサロンや井戸端会議が開かれていないか？** ■認知症の人の家、一人暮らし高齢者の家など。 ■要援護者の福祉問題にみんなで関わっているか。
⑤	**趣味などのお楽しみのグループが多数あるか？** ■そこに要援護者も仲間入りしているか。 ■地域の要援護者のお楽しみを支援しているか。
⑥	**ご近所特有のふれあいが行われているか？** ■ガーデニング仲間、犬の散歩仲間、ラジオ体操の仲間、家庭菜園の仲間など。 ■そこに要援護者も仲間入りしているか。 ■仲間が困ったとき助け合っているか。

⑴ふれあいの豊かさは助け合いの条件の１つ。

そのご近所でふれあいが盛んであるかどうかは、助け合いが行われるための大事な条件の１つと言っていい。ふれあいが豊かなご近所では、デイサービスに行く人が少ない。

ある地区で引きこもりや問題の人が多いのでわけを調べたら、その地区ではふれあいが極端に少なかった。サロンも少ないし趣味活動も少ない。「そういえば、サロンが盛ん

だった時は､いま引きこもっている人もそれに参加していた」ことを住民が思い出した。

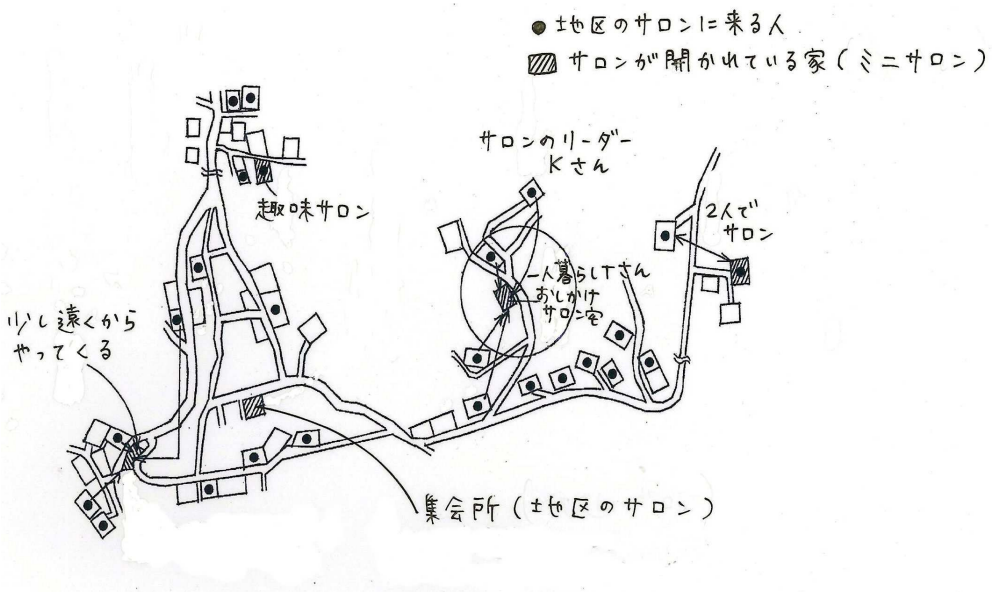
⑵困ったとき助けてくれるサロンか。要援護者を入れているか。

そして最も大事なのは、それらのふれあいの場で助け合いが行われているかどうか、困ったとき助けてもらえるサロンになっているかどうかである。そうやってふれあいはさらに深まるものなのだ。ただふれあっていれば助け合いは自然に始まるだろうと思っている人がいるが、そうではない。むしろそのふれあいの場で助け合いをすることで、絆がさらに強まるのだ。

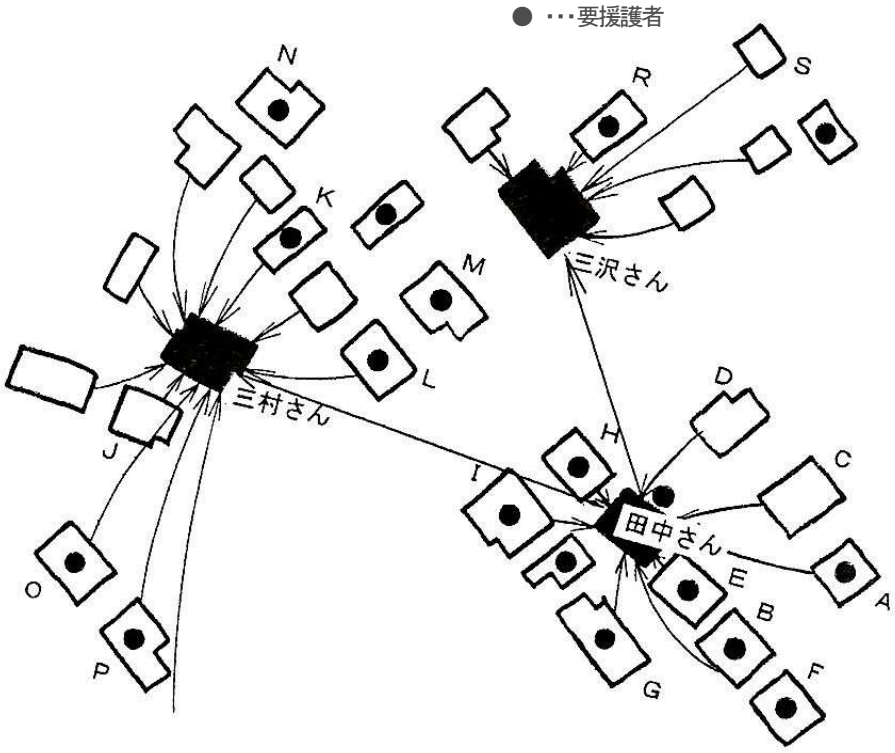
⑶そのご近所に特徴的なふれあいを探せ。

ふれあいはどこの地区でも行われている。一見、ふれあいはないように見えても、何らかの形で行われている。それを見逃さないようにしなければならない。

＜マップ事例３７＞二次会が各所で開かれていた



＜マップ事例３８＞要援護者も交えたご近所サロン



⑬住民の生活環境

	チェックポイント
①	**買い物、通学、文化活動などで不便事はないか？** ■移送サービスを個人的にやっている人は？ ■ご近所ごとに住民の集まれる場があるか。 ■趣味活動を楽しめる場がご近所ごとにあるか。
②	**災害時要援護者と支援者を特定したか？** ■未登録の人はまだいるか。 ■未登録者の支援者を確保したか。 ■班ごとの避難支援体制を作ったか。
③	**過疎化で町が消滅の危機に瀕していないか？** ■若者が戻ってきていないか。Ｉターン、Ｕターンは？ ■集落の活性化のヒントは見つかったか。 ■残された高齢者でどのように助け合っているか。
④	**空き巣などの犯罪の被害に遭っていないか？** ■住民が連帯して空き巣撃退をしているか。 ■どんな犯罪が増えているか。被害に遭った人は?
⑤	**集落に子供がわずかしかいない。どうする？** ■子ども会組織はもうやめてしまったか、継続しているか。 ■ご近所単位に子ども会を作っていないか。 ■最近子連れでＵターンした人はいないか。 ■集落に戻った若者はどんな仕事をしているか。
⑥	**新旧住民の交流がいまいち。どうする？** ■両者の交流を仕掛けている人はいないか。 ■その人はどういうことをしているか。

⑴生活問題もまた「福祉」問題の１つだ。

今の福祉問題とは、ただ特定の要援護状態にある人の問題だけでなく、私たち普通の住民の生活上の諸問題も、これに含めるようになっている。ご近所で生活していて不便と思うことは何か―それもまた福祉問題なのだ。

⑵一般住民の不便事は要援護者には死活問題。

一般住民の生活上の困り事が、要援護者には増幅されて重大な福祉問題になるということもある。店がなくなり、車で郊外まで出かけなければならないのは一般住民にとっての困り事だが、車のない一人暮らし高齢者にとってはほとんど死活問題になる。

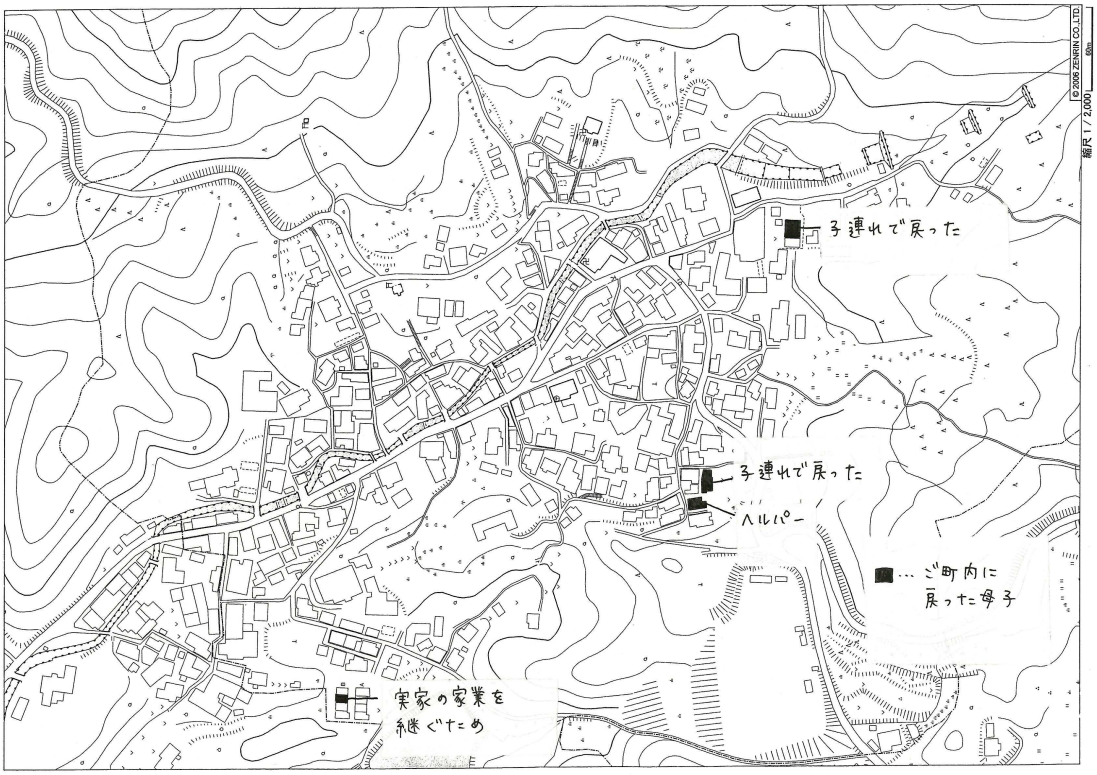
⑶あきらめてしまうと、「困り事はない」となる。

マップづくりの場で「生活上不便なことは？」と聞いても、「ここはいい所だよ」という答えが返ってくる。本当にそうなのではなく、その不便事がなかなか解決しないのであきらめてしまったから、ということもあるのだ。

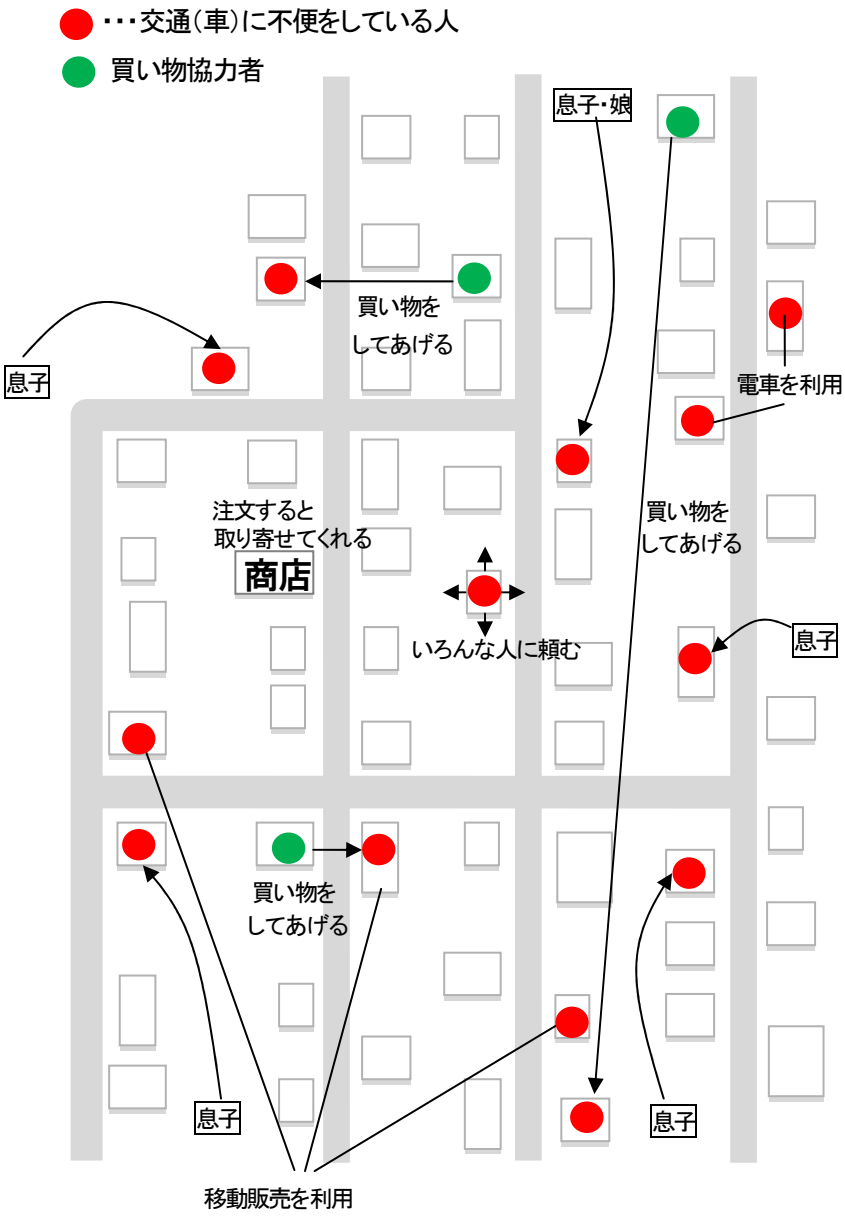
⑷だれかが解決行動をとっている。それをヒントに。

おもしろいもので、地域の生活福祉問題にはだれかが何らかの解決行動をとっている。それを探して、その方式で地域全体で取り組んでいけばいいのだ。

＜マップ事例３９＞若者が過疎地に戻ったとすれば…

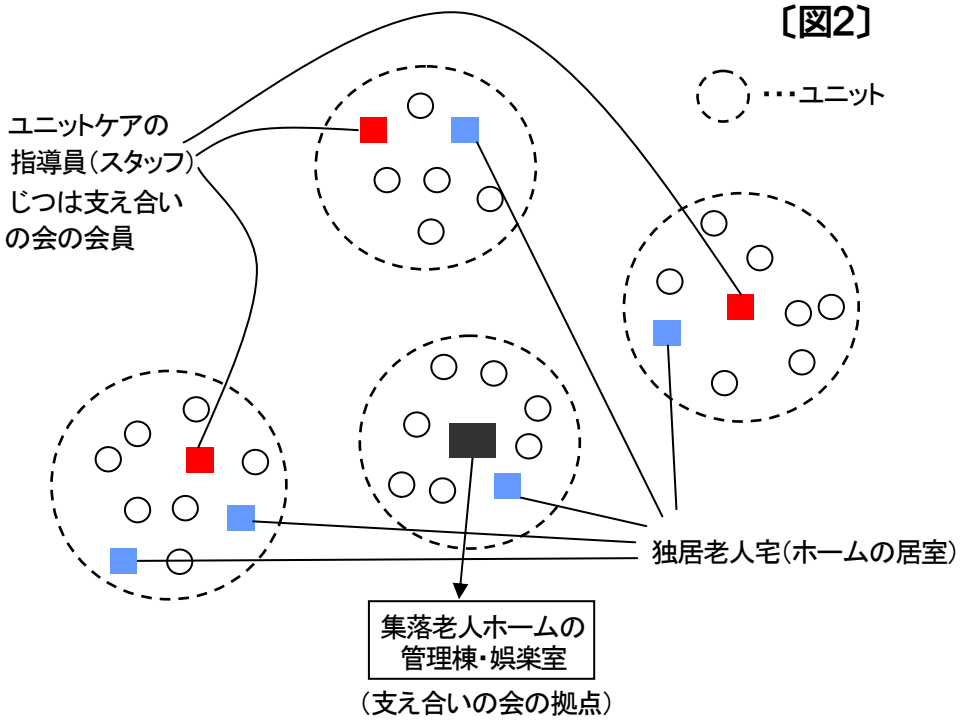


＜マップ事例４０＞買い物に不便をしている人はどんな知恵を？

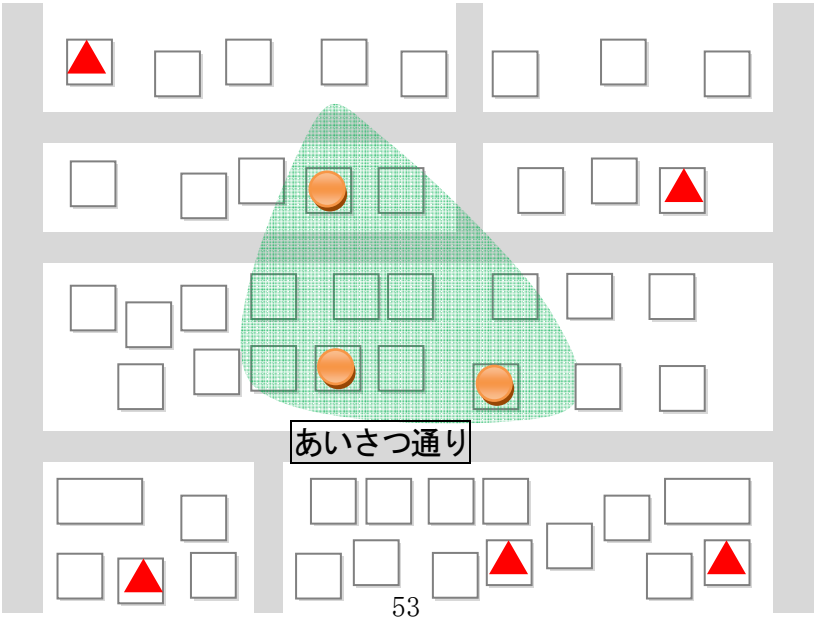


＜マップ事例４１＞過疎地で高齢者はどうやって助け合っているか

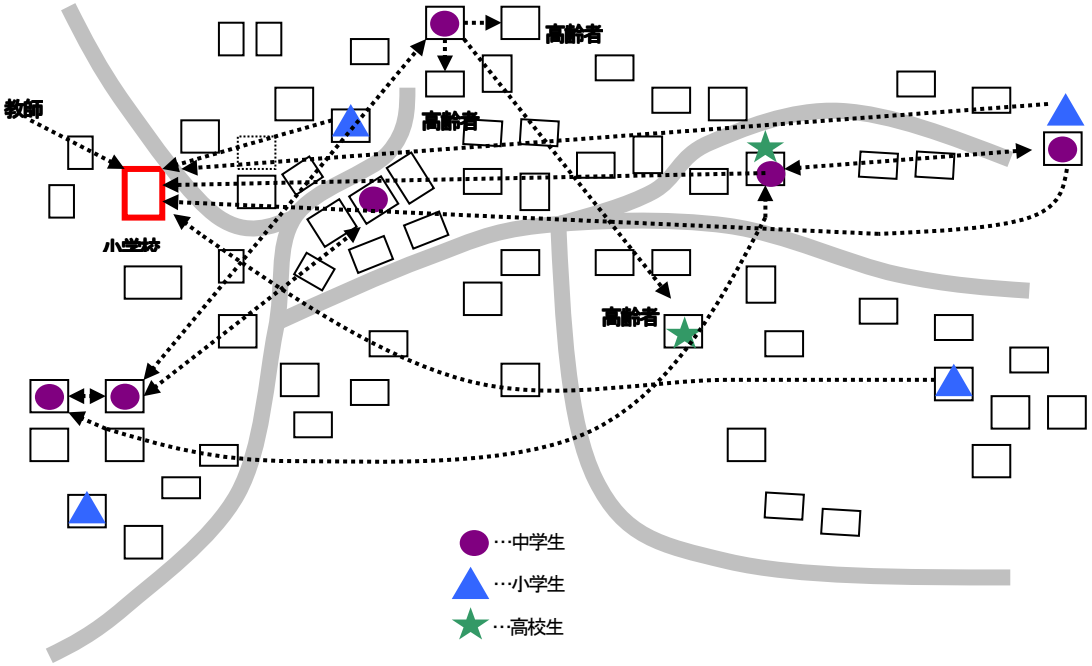
〔図2〕



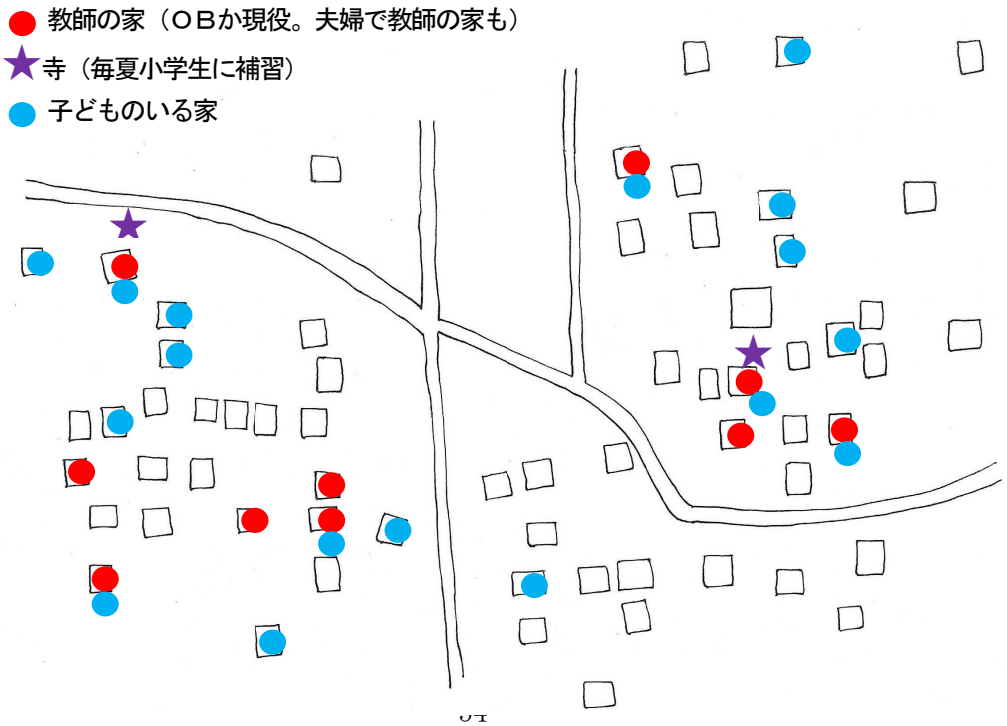
＜マップ事例４２＞ふれあいのある向う三軒は空き巣被害がない



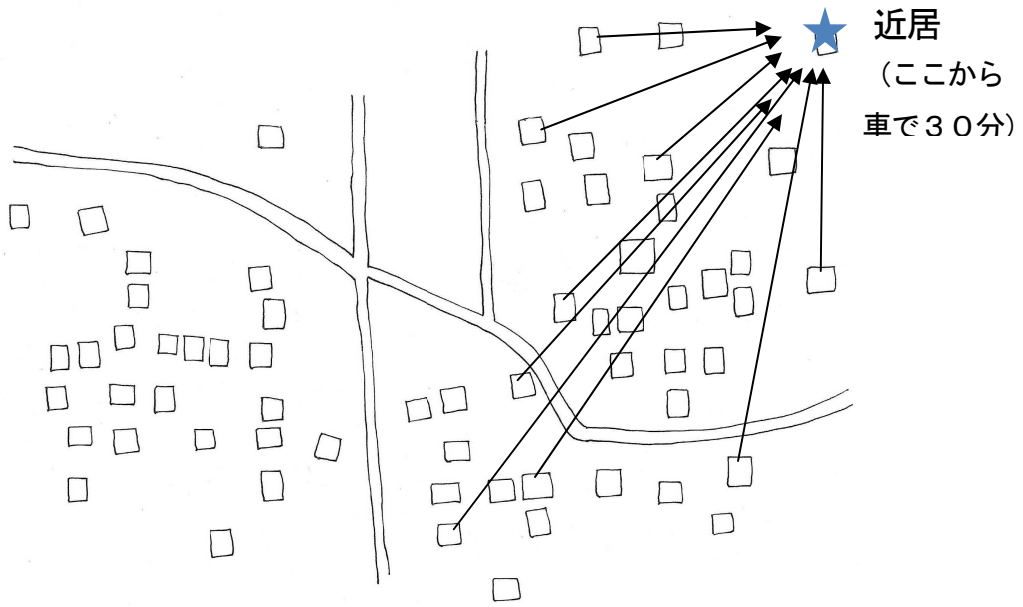
＜マップ事例４３＞中学生と小学生が一緒に遊んでいた



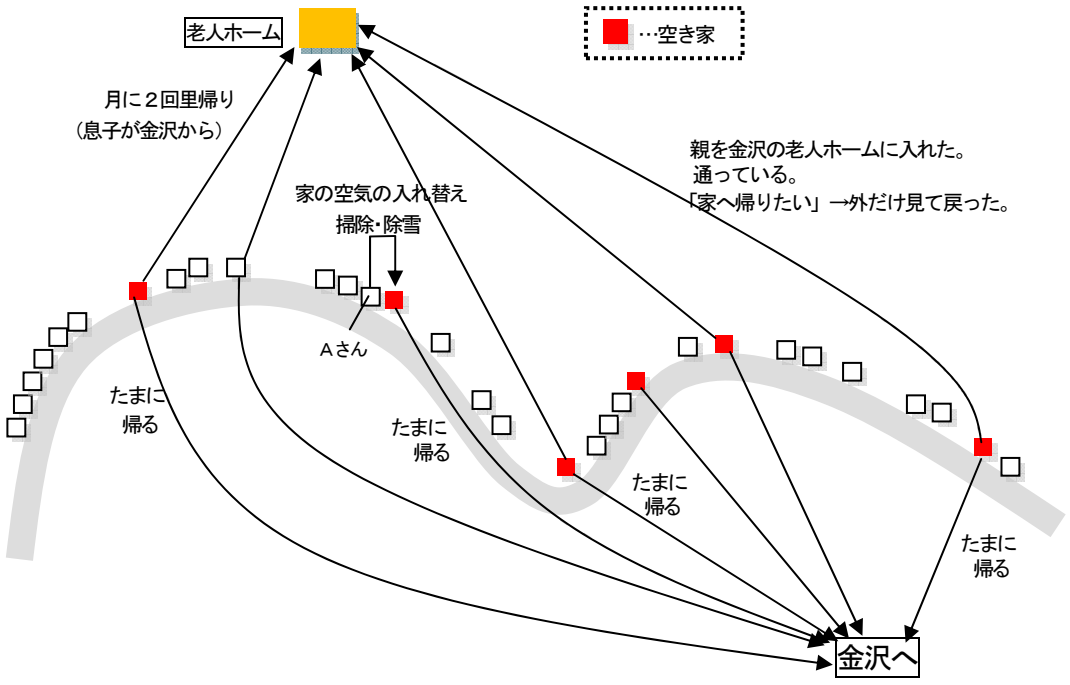
＜マップ事例４４＞１集落に元教師が１１名も。集落小学校を作れ



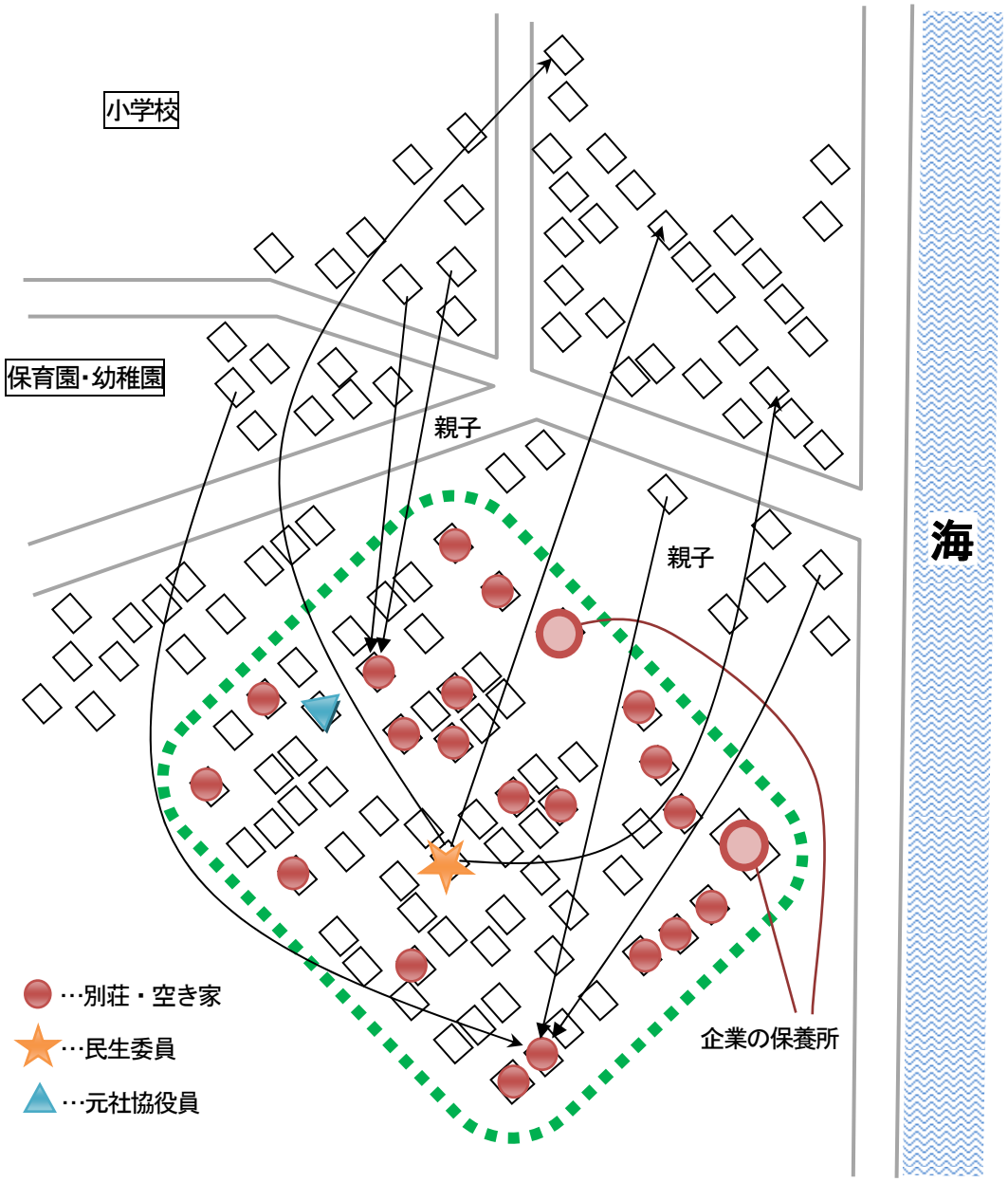
＜マップ事例４５＞息子は隣町に近居していた



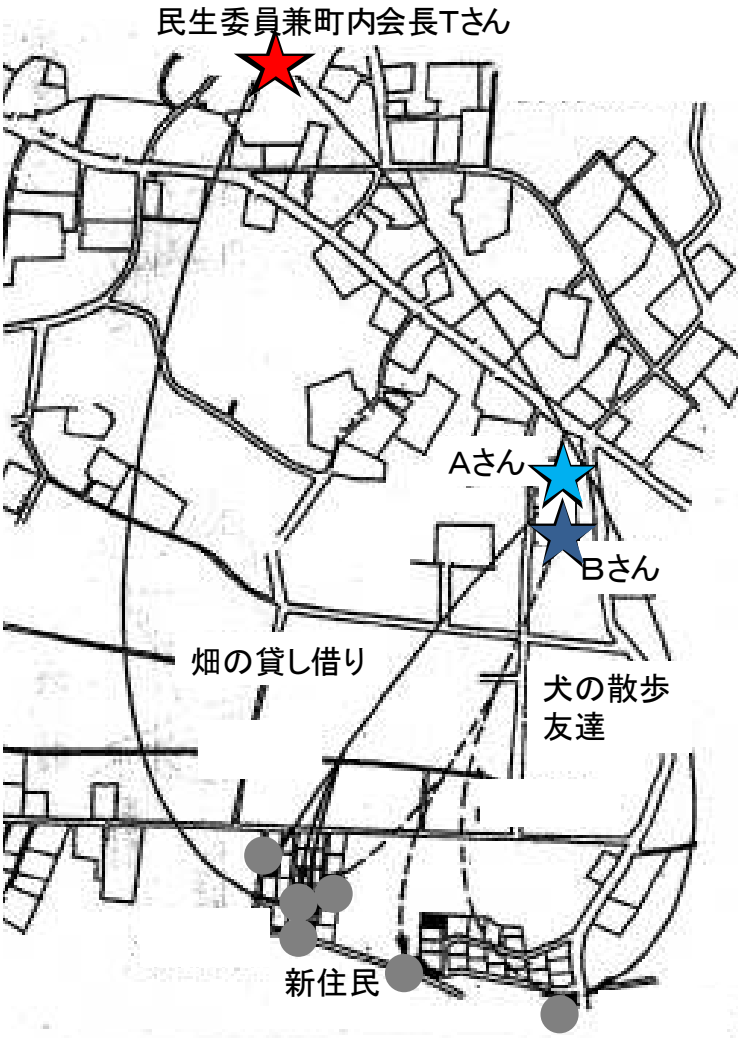
＜マップ事例４６＞金沢が輪島を壊していた



＜マップ事例４７＞海辺の町。津波が来たら高台の別荘へ



＜マップ事例４８＞課題は新旧住民の交流。ヒントがあった



⑭ご近所福祉推進体制づくり

‹ご近所福祉推進の中核者を決める›

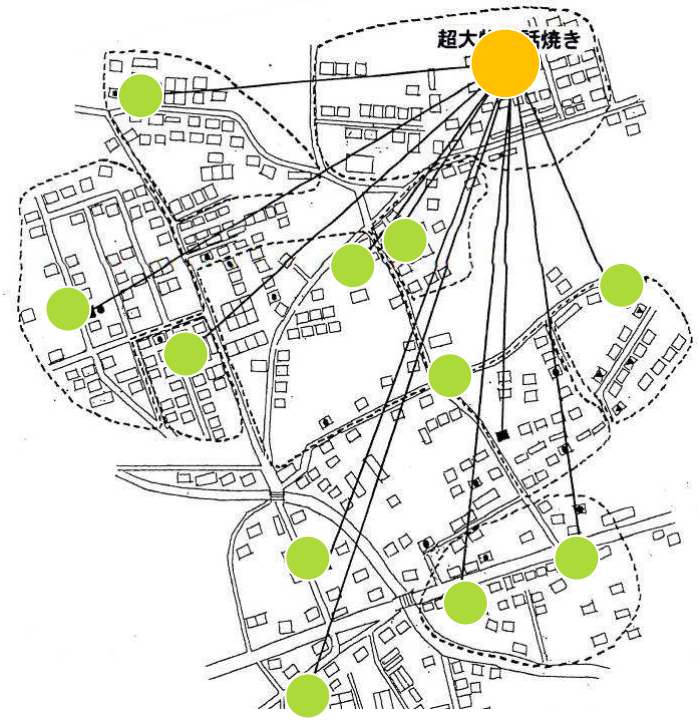
ご近所福祉を推進するには、まず推進者数名を探さなければならない。大事なのは、肩書きのある人とか、組織のリーダーをしている人よりも、実際に足元の隣人の世話を焼いている人を探すこと。マップをつくれば、その違いが見えてくる。

この人物の役割は、ご近所（３０～８０世帯）に在住して、そこの助け合いを推進すること。むろん自身もご近所内の要援護者の面倒を見てもいいが、基本はご近所内での住民の助け合いをバックアップすること。

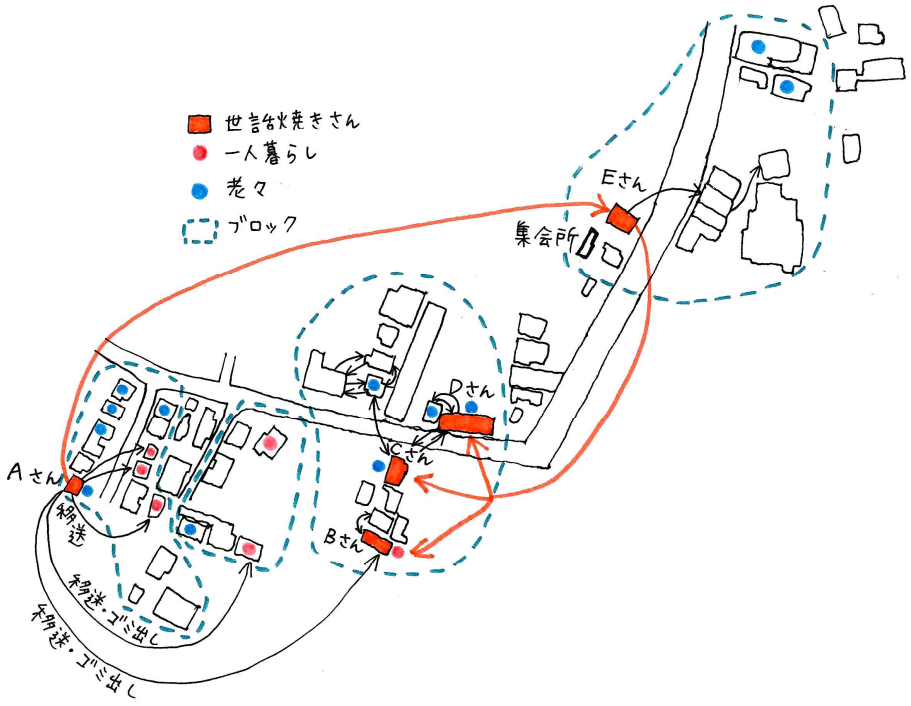
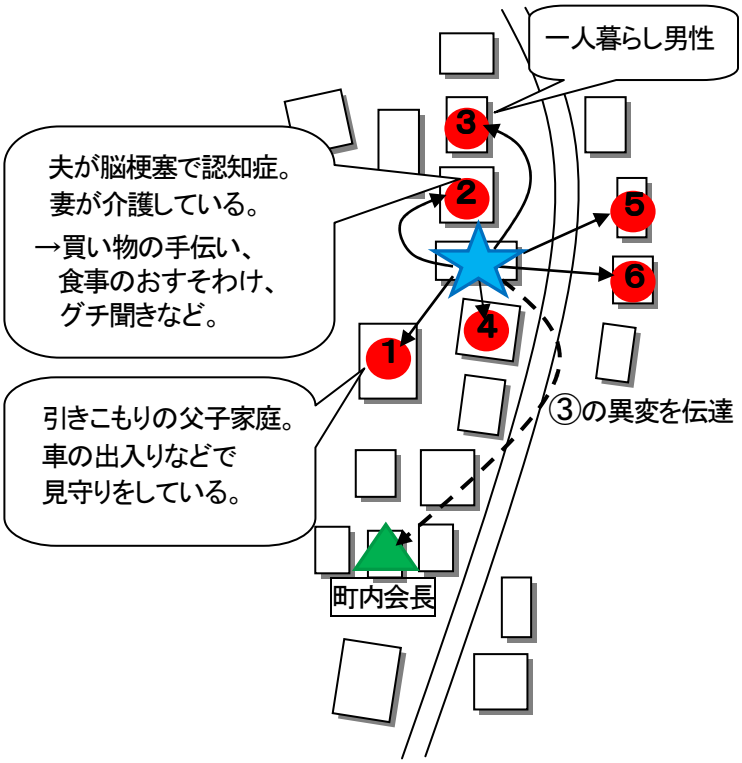
そのご近所が存在する自治会（町内会）の役員は、直接ご近所に関わるのでなく、できるかぎりご近所福祉推進者を後押しする役に下がること。

	人（所属組織・連絡先）	協力者（同）	役割分担・活動領域
①			
②			
③			
④			

＜マップ事例４９＞超大型世話焼きさんがいれば…



＜マップ事例５０＞大中の世話焼きさんが連携



＜マップ事例５１＞中型世話焼きさんの行動半径は意外に小さい